「元」一般学生の鉄道建設記録

名無しの音

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「一般学生の鉄道旅記録」の「作者自身」が「ノリと勢いで」ＩＦストーリーを創作していく！

そんな小説。

ある日某コンビニミサイルに当たって亡くなってしまった主人公が鉄道の無い異世界に絶望して自分で鉄道を作っちゃうお話

元の「一般学生の鉄道旅記録」もよろしくお願いします

ｈｔｔｐｓ：／／ｓｙｏｓｅｔｕ．ｏｒｇ／ｎｏｖｅｌ／１９５０２８／
コラボ、リクエストなどはＴｗｉｔｔｅｒのＤＭ、又はメッセージにてお願いします
ｈｔｔｐｓ：／／ｔｗｉｔｔｅｒ．ｃｏｍ／ｓｙｏｕｓｅｔｕｎａｎａｓｈｉ

目次

設定・番外編
0話「設定・解説の時間だオラァ！」 1
番外編　10話突破記念 3.
2話「もしも」 8
番外編　クリスマス記念 15.
9話「……雪遊びだー!!!」 16
番外編　新年記念　X話「神の世界から」 21
プロローグ
1話「どうせなら特典とか欲しかった」 26
2話「私の荷物はどこいったの？」 31
3話「異世界にお父さんとお母さんが出来ました！」 36
4話「やっぱり平和が一番！」 41
学校生活編　入学
5話「学校に通いたい！」 45
6話「元の世界にはこういう人いなかったよね」 50
学校生活編　文化祭
7話「文化祭の準備って楽しいよね」 55

８話「本当のお祭りみたい」――60
９話「こっちの世界でも長いんだね…」――66
学校生活編　夏休み
１０話「前の世界ってめっちゃ楽だったんだね…」――71
１１話「少し酔いそう…」――76
１２話「なんか中途半端な感じ～」――81
学校生活編　技術伝授
１３話「やっぱり転生ってチートだと思う」――85
１４話「今更だけど先輩なんだ……」――89
１５話「名前は前の世界と変わらないだ…」――93
学校生活編　卒業、そして成人へ
１６話「良い人すぎでしょ！」――98
１７話「…大丈夫かな？」――102
１８話「……っ!?」――106
レイの町ーケイの町間
１９話「嘘の見分け方についても」――110
２０話「あってはいけないからね！」――113

２１話「よしっ、待って～」――118
２２話「ねぇ、なんでー」――122
２３話「筋肉モリモリの方」――127
２４話「お気をつけて」――131
２５話「気ニシナーイ気ニシナーイ」135
２６話「大変な一日の始まりだ！」140
２７話「それぞれのレーンにお並びください！」――144
２８話「もっと早くなりますよ」148
２９話「面白い発想ですね」――151
３０話「本当、信じられません」155
３１話「会議を始めます」――158
ケイの町ーシャラの町間
３２話「もっと遠くに!!」――162
３３話「認めん、認めんぞーーー!!!!」166
３４話「……出来そうだわ」――170
３５話「物好きであるかもしれないですけど」――173
３６話「休憩！解散！」――176
３７話「うぅ…測りづらい」――180
３８話「買います！」――185

３９話「初めてなんですけど……」 189
４０話「引き継ぎ終了っ！」――― 194
４１話「Ｈｉｋａｒｉ、安らかに眠れ」――― 197
４２話「わざわざ列車を一本逃してやる事」――― 201
４３話「需要が多過ぎたのじゃ」 205
４４話「これが本当のお財布キラー☆」――― 209
４５話「流石にもう騙されないよ！」 213
４６話「大人の女になってる!?」 218
４７話「いいセンス」――― 222
４８話「うん！飲もう!!」――― 227
４９話「海ー!!」――― 231
レイの町ーシャラの町間
５０話「駄目じゃん」――― 237
５１話「Ｎｏｚｏｍｉちゃんです☆」 240
５２話「Ｎｏｚｏｍｉちゃんピンチ」 245
５３話「Ｈｉｋａｒｉは私達の娘だから」――― 249

５４話「は～いやりま～す」

設定・番外編

０話「設定・解説の時間だオラァ！」

以下注意事項（ぴーんぽーんぱーんぽーん）
この小説は「一般学生の鉄道旅記録」のＩＦストーリーです。
ガバガバ設定だけど許してください。

以下設定
小川　　光（おがわ　　ひかる）
主人公、横須賀生まれ小学まで横須賀育ち、中学から横浜に引っ越しをした。
鉄道好きである程度の鉄道知識は持っている。プ〇ウスミサイルにあって死亡
現在転生生活中

Ｈｉｋａｒｉ（ヒカリ）
主人公、小川　　光の転生先の名前、森生まれ町育ち、成人後、社長になる。
名前を変更したのは「せっかく女性になったんだし」だそうな（あんまり変わってな

い）

現在社長室生活、乗り鉄、撮り鉄、現在（異世界年齢で）成人済み

お義父さん（仮名）

Ｈｉｋａｒｉの義父、親切心の塊みたいな人、詐欺とかによく騙されそうになる。

お義母さん（仮名）

Ｈｉｋａｒｉの義母、正義感が強い人、詐欺に騙されそうなトーサンを毎回止めている。

Ｋａｉ（カイ）

男性、Ｈｉｋａｒｉの友人、後に社長秘書になる。

Ｙｕｉ（ユイ）

女性、Ｈｉｋａｒｉの友人、後に社長秘書になる。

Ｋｉｒｉｙａ（キリヤ）

男性、Ｈｉｋａｒｉの部下、後に部署取り締まり役にな。

Ｎｏｎｏｋａ（ノノカ）

女性、Ｈｉｋａｒｉの部下、後に部署取り締まり役になる。

世界観

国は存在せず、町がそれぞれ独立したルールを作って生活している。
村はその町から逃げて来た人々によって作られた場所、大まかなルールしかなく、結構自由
若しくは出来立ての町の事（規模によっては最初から町の場合もある）を指す。
町と町の間は砂利道で大まかに繋がっており町間の移動は馬車、徒歩が主流。
魔物などは存在せず、いるのは人間と一般的な家畜、動物など
お金は金貨（２０００円）、銀貨（２００円）、銅貨（２０円）、幻の白金貨（価値不明）で世界共通通貨となっている。
魔法の生成は魔術士と僧侶（治癒魔法のみ）が使える。
生物の１日で溜まる魔力量はとても少なく生命力から生成されるので魔術士と僧侶の寿命は必然的に短い。
一般人は「スクロール」と言う魔法陣が書き込まれた紙を使って初めて魔法が使えるようになる。
「スクロール」は使えば使うほど消耗し最後は跡形も無く消える。
下級魔法ほど消耗が少なく大魔法になると消耗が激しくなる。
「スクロール」は魔術士、僧侶の命を削って作られる物なので、とても高価。
一部の貴族くらいしか手に入れられない。

そんな理由で魔法技術は停滞しつつある。
人類には「スキル」が1つ成人と同時に備えられるスキルは神に選んでもらうか自分で選ぶか選べる。
神に選んでもらう方がレアなスキルを得る事もあるがでクソスキルに当たる可能性もある。
実際は神がガチャして出たのをスキルにしている。
自分で選ぶ方はノーマルスキルのみしか得る事が出来ない。
世界マップ

□　町
△　村
丨　道
丨　川
○　山

菜森鉄道配線図

手書き注意
□　ホーム
ー　線路
貨　貨物専用ホーム

解説
鉄道
レールを引いた線路上を車両が走り、旅客・貨物を輸送する運輸機関
イギリス発祥で日本で最初の区間は東京（現品川駅）―横浜間（現桜木町駅）だった。
菜森鉄道
Ｈｉｋａｒｉが創設した私鉄会社
Ｈｉｋａｒｉの元の世界の知識によって完全に「俺の鉄道ＴＵＥＥＥＥＥＥ、ＨＡＥＥＥＥＥＥ」状態
車両は全て２１ｍ級線型は緩やか（にしている）
レイの町
Ｈｉｋａｒｉ、Ｈｉｋａｒｉの義両親、Ｋａｉ、Ｙｕｉが住みＲｅｎａが町長をやっ

ている。
大陸の中心辺りに位置するので商業がとても盛んである。
ここから４つの道が広がる。
ケイの町
Ｓｈｉｋｉさんが町長をやっている町
町の下に森が広がっており、それを使った林業が盛んである。
力仕事が主にあるので町民の男性は鍛えられており一部の層から人気の町でもある。
アルルの町
Ｋｉｒｉｙａの住む町
鉱山のふもとに位置していて工業が盛ん。
ここで菜森鉄道の車両、レールを作っている。
アイラの村
菜森鉄道が駅を作る為誘致した結果出来た村
レイの町とケイの町の間に位置しておりレイの町などを含めた町とは友好的に接している。
町に発展する気がするがまだ先らしい。
アークの村

セラの町から逃げた人々が作った村
ルールがなく「土地はあげるから自分の物は自分で守れ」の理論
みんな守りを固めるので村内での争いはあまり起こらない。
森の麓に位置している。
今後もキャラ、町などが増えたる予定、

もしかしたら今後大幅な仕様、設定変更があるかもしれない（未来予知）

その他質問はＴｗｉｔｔｅｒのＤＭへ

番外編　１０話突破記念　３．２話「もしも」

もしもＨｉｋａｒｉが「養子を断っていたら」

「あのねｈｉｋａｒｉちゃん、貴女がもし良ければ、私達の「養子」になる気はないかしら？」

「・・・・・・」

少し考える

養子になったらこの世界での行動に一人で動くよりより動きやすくなるし、もし帰る方法が見つからなかった場合も今後安心して生活する事が出来る。

だけどそうなると本当の親を裏切るようにも感じる。

親への裏切りは出来るならしたくはない。

しばらく考える

出来るなら１日くらいの時間が欲しいが今の私はおじさんおばさんの親切心でここ

にいる。おじさんおばさんには迷惑はかけられない。そのおじさんおおばさんにナイフを向けた人が言うセリフでは無いけど……

早く決断を出す必要がある。

「ごめんなさい、これ以上迷惑は掛けられません」

おじさんおばさんに頭を下げて言う。

「そう……」

そう言って少し残念そうな顔をする。

「でも、なんか困った事とかがあったらいつでも来てね」

おばさんはそう言ってくれた

だけどさっきも言った通りこれ以上迷惑は掛けられないので多分頼る事は無いと思う。

「それじゃあ、夕食だけでもどう?」

「すいません、遠慮しておきます。余りお腹空いていないので」

「そう……」

急いで身仕度を整える、余り長くはいない方がいい

おじさんに玄関に案内してもらい、家を出る。靴はサンダルに変わっていた。

「ありがとうございました、この恩、いつかお返しします」

そう言い頭を下げる。

「それでは!」

そう言って家から離れる。

数分歩き、門に到着。

「ちょっとお嬢さん、夜はお家に帰った方が良いよ、こんな時間に外出なんてやめた方が良い」

門番さんに声をかけられる。

「すいません、でも今出ないといけないんです」

だって早く帰らないと親が心配するから
「そうか……なら気をつけるんだよ」
門番さんは通してくれた、普通なら通さないと思うんだけど…
「ありがとうございます」
そう言いながら町を出て歩く
外は街灯が一つ無く、日は出てなくて真っ暗だった。
「っ良し！」
気合いを入れて直した後、歩き始める。
家に帰るために……

～～～その後（ダイジェスト）～～～～～～

「あ、この果物美味しい！」

「動物を狩れーー！」

「この皮使ってバッグを作ろう！」

「出来た！それじゃあここに食料品を入れて」

「旅人って良いかも、町への通行料的な物も無いし、家に帰る手掛かりにもなるし」

「お金がない……ならば稼げばいいじゃない！」

「旅する商人、始めました！」

「お金が無いよ～金欠だ～」

「結婚⁉？考えた事も無いよ」

「もうあれから数十年、そろそろおじさんおばさんに恩を返さないとな」

「どうも、おじさんおばさん、Ｈｉｋａｒｉです」

「もうおじさんになっちゃったよ、今帰っても私だと分かってくれるかな」

「いや、現在はおばさんか。あっははははは（笑い）」

「あ～ぁ、もうおばあちゃんになっちゃったねー。もっと旅したかったな～」

結局、家には帰れずじまいだったなぁ～

多分もう８０過ぎのおばあちゃんだよ、医療が進歩していない世界で良くここまで生きたと思わないかい…

誰もいないけどね…

来世もこんな幸せな人生が歩めたらいいな

その数ヶ月後……ＸＸＸＸ年〇月〇日、小川　光ことＨｉｋａｒｉは　年齢８４歳にてその人生を全うした

その人に悔いは何一つ無く

幸せそうに笑顔でこの世を去った。

番外編　クリスマス記念　１５．９話「……雪遊びだー!!!」

「んーっ、よく寝た」
まだ眠い体に鞭を打ち、ベットから出る。そして出ると共に寒い空気が布団で温めていた身体を冷やして来る。
「うー寒ぃ……ん、おぉ！雪が降ってる！……雪だるま作りたぃ。」
そう思いながら部屋を出てリビングへ向かう。
「おはようＨｉｋａｒｉちゃん。朝ご飯出来てるよ」
「おはようＨｉｋａｒｉ、さあ席に座って」
「おはようお義母さん、お義父さん……いただきます」
「「いただきます」」
挨拶をして、朝食を食べる。朝ご飯は家族全員で食べるのがこの家での決まりだ
〜〜
「「「ご馳走さまでした」」」
「Ｈｉｋａｒｉ、今日は雪が積もって滑りやすくなっているから気をつけろよ」

「はーい」
　歯を磨いたり、着替えなどの支度を整え、家を出発する。
「行って来まーす！」
「いってらっしゃい」
　今日は休日だから家にいても良いのだが今は「雪が積もっている」……ならばやるべき事は一つ！
「………雪遊びだー!!!…と言う事でやって来ました！公園！」
「いきなり連絡して来て、やるのが雪遊び？」
「大人でも、子供の様に遊びたい時があるんだよ。分かってくれ」
「大人でもって私達まだ子供でしょ？」
「俺雪だるま作りたい！」
「いよーし！作ろうＫａｉ！後かまくらも！」
「おう！レイの町一大きな雪だるまにしてやるぜ！」
「おぉー！」
「あぁ、私も作る～」
　～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
「……出来た！身体だけ！」

「顔無しだね」
「顔無しだな！」
「顔の素材見つからなかったからね」
「…腕の枝はあるのにな」
「人参でも持ってくる？」
「何で人参？」
「いや、何となく」
「あぁ、そう」
「まぁ見つからないから後にして、次はかまくらだ！」
「おぉー!!」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「……と言っても、どうやって作るんだ？かまくら」
「う〜ん、積み立てるでは無さそうだし」
「砂の山のトンネルみたいに山を作った後、中を掘れば良いんじゃ無い？」
「さっすがＹｕｉ！それで行こう！」
「……なんか嫌な予感がするけど…まぁ大丈夫でしょ！」

〜〜そこから数十分〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「ゼエ、ハァ~。ゼエ、ハァ~。……疲れた」
「山を作るのは簡単だったんだけどね」
「中を掘るのが大変だったたね。雪を固めたから掘るのに力いるし」
「まぁ完成したんだし「結果良ければ全て良し！」だよ！Ｋａｉ」
「労いの言葉が欲しい」
「じゃあ……お疲れ、Ｋａｉ！報酬の雪兎三号だ」
「いつの間に作っていたの？Ｈｉｋａｒｉちゃん」
「Ｋａｉがかまくらを掘ってる隙に。だよ？」
「雪兎作って無いで掘るの手伝って欲しかったな、俺は」
「しゅみましぇん……だからほっぺちゅねらないで。……あ、後Ｙｕｉの分もあるよ！はい！」
「あ、ありがとう」（いつの間に現れた雪兎に困惑中）
「そしてこれが私の雪兎！これでお揃い。３姉妹！」
「おぉ、揃ったな」
「ん、そうだね？」（未だ困惑中）
~~~~~~
「結局雪だるまの顔見つからず仕舞いだな」
~~~~~~

「…そうだね。本当に無かったね」
「枝だと細くて駄目だったからね。全く、大きくするから」
「次回は顔の材料を持参してから作ろうね」
「おう！それじゃあな！」
「じゃあね～また明日学校で！」
「はーい、じゃあね～」

そう言い、３人は解散をした。
後日、いつの間にかその雪だるまに立派な顔が出来ていたのは３人は知らない。

……因みにその日、年に一度の聖なる夜の日と一致してたり無かったり……

番外編　　新年記念　　Ｘ話「神の世界から」

「「あけましておめでとうございます」
「どうも！作者の名無しの音です！」
「作者の分身の分身で、もはや分身ではなくオリキャラと化してる今作の主人公！Ｈｉｋａｒｉでーす！」
「さてこのお話、タイトルがＸ話になっている通り。本編とは全く関係無いＩＦのＩＦ！Ｈｉｋａｒｉ達の世界で言う神の世界から皆様へお送りして参りまーす！」
「因みに神様は現在お仕事中でーす！正月は現世に滞在してた亡霊が何かこう、聖なるパワー？で沢山来るから正直嫌いなんだって」
「神様がお仕事中に仕事せずにここで話している我々は一体？」
「後で神様から天罰が来そうだよね」
「大丈夫じゃないかな？だって今回は最初に言った通り「本編とは全く関係ない」んだし」
「だよね～あはははは」
「あはははははは」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

神様（覚えておきなさいよ、あなた達……）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「え～何か寒気がしますけど行きましょうか」
「ソ、ソウデスネ」
「とは言っても周りに何も無い真っ白な空間にカメラと私達２人。やる事無いですね！」
「そうですね！」
「まぁとりあえず空間を真っ白から正月っぽいやつに変更してゲスト呼べましょう」
「音楽流しましょう！音楽！和風っぽいの！」
「じゃあラジカセをポイッと」（ＢＧＭ「和風っぽいの」）
「演奏者とかじゃ無いんですね。残念です」
「呼べますけど出てくるの亡霊ですし言う事聞いてくれるか分かんないので勘弁でお願いします」
「そうですか。じゃあ鉄旅させろ」

「あなた自分の世界に鉄道引いてるんですしそれに乗れば良いじゃあ無いですか」
「数駅しか無いからつまらないし職権乱用はＮＧなんで」
「…私みたいな事言いますね」
「一応、あなたの分身の分身ですから」
「そうでしたね、忘れてました」
「分かればよろしい」（お雑煮食べながら）
「あ、いつの間に!?」
「何でもアリの空間だからね。コタツ入って甘酒飲んでみかんとお雑煮食べる事も可能よ」
「う～ん、ご都合主義」
「タグに入ってるからセーフよ、セーフ」
「さいですか、じゃあ次にゲストを呼びましょう」
「「村井さん」を召喚!……あれ?来ない」
「すいません、村井さんは性別もキャラも定まっていないキャラなので勘弁を」
「またなの?」
「またです。すいません他の人で……」
「じゃあ桜森　奈緒さん（電車でＳ（相模）　～勝利（賞金）の為に　の登場人物）を」

「あの、他作品のキャラはちょっと、…てか何で知ってるの」
「そりゃあこの空間がメタありご都合主義アリアリの何でも空間だからね。シカタナイネ」
「あ、私が初めて書く二次創作作品、「電車でＳ（相模）　～勝利（賞金）の為に～」連載中でございます！是非一度読んでみてください！」
「他小説を全く関連性が無いこの小説で告知をしていくスタイル、嫌いじゃないわ（キリッ）」
「…でゲストはどうするんですか？」
「もう面倒だから無しでいい」
「それでは！新年ですしＨｉｋａｒｉさんやい、今年の目標とか言って、どうぞ」
「うーん……　延伸しまくって自社線で大回りをする…こんくらい？」
「わー最初の方に言った事ととてつも無く矛盾してて驚きしか無いわー」
「棒読みで草」
「だって大体察せる内容だったし」（分身親舐めるな）
「あっそう、じゃあ作者の番！」（関係ねぇ、落ちろ）
「ん～、小説を一作品完結させる事？」（ギャース）
「お願いだからこの小説の時間を一気に飛ばして終わりにさせないでよ…」

「それはーどうかなぁー」
「えっ、ね、ねぇちゃんと答えて貰わないと困るよ、私」
「どうやら時間のようですね。それでは閉めましょうか！」
「ちょっ無視しないで、閉めないで、ちゃんと答えて！」
「…分身何だから察して（^^）……それでは！作者、名無しの音とＨｉｋａｒｉちゃんでお送りしましたーー！さよーならーー！」
「さ、サヨーナラー（泣）」

プロローグ
1話「どうせなら特典とか欲しかった」

～ある日　午前２：００～

「夏の鉄道旅も終わって、後は休日をゆっくり過ごすだけだー！」

私は「小川　光（おがわ　ひかる）」現役高校生で鉄道好きだ。

今日、というか昨日か、茨城県にある大洗町に観光に行った帰り、これから徒歩で家に帰宅する所

「ん？」

ふと道路を見ると某ト○タ車のプ○ウスが信号無視

「いけないだーいけないだー警察に行ってやろー。ねぇ知ってる？信号無視ってね、危ないんだよ。お母さんと先生がね。言ってたのー（マジキチスマイル）」

深夜テンションおかしくなっていた私はそんな子供みたいな事を口にする。

「え、ちょっと待て、あのプリ○ス、こっちに突っ込んできてない？ヤバない？とりま逃げよ」

とりあえず走って逃げる。

「ヤバいよあの○リウスの運転手完全に私を殺しに来てるよ！だってめっちゃ追ってくるもん！」
必死で逃げる。

結果

「ダメでした」
無理じゃん！そもそも！だってあっちはアクセルベタ踏みの車でこっちは走りだよ！無理じゃん！（大事な事なので2回言いました）
逃げられるのは陸上選手か自衛隊かスタントマンくらいだよ！（偏見）
「てかここどこよ」
現在森の中、体は痛みも感じない。至って健康な体
空は変わらず暗い。
「歩こう、とりあえず、線路があったら近くの鉄道駅から帰って家があったら今の居場所を聞こう」
と言う訳で「歩く」「歩く」「ひたすら歩く」
X時間後

「日が開けちゃったよ！どうするよ、めっちゃ親心配しているよ！なのに未だに森だよ！耳すましても小鳥のさえずりくらいしか聞こえないよ！」

「……まぁ、歩くしか無イデスヨネー」

また「歩く」

X時間後

「……」

もう喋る体力も無い。体は傷つき所々血が出ている。

足がヨロけてそのままどこかの木に倒れこむ

そしてそのまま意識を手放す。

「ん、ここは？」

起きた時に言うお決まりのセリフを言ってみる

「てか、マジでここどこ」

見知らぬベット周りには棚があって棚の上にはりんごと思われる切られた果物と果物ナイフ、床は木で出来ていてまるでホテル、身体にあった傷はなぜかなくなっている。

「…夢、では無いよな」
一応護身用に果物ナイフを手に取り、周りを見渡す。
「これ結構いいナイフだな」
両面に刃があり持ち手は木、高級の包丁見たい。
「これなら武器としては十分だな」
なんて中二病心満載で言ってみる。
結構しっくりくる。
ドアが開く
「あ、起きたのか」
と言って一人の男性が近ずいてくる。
すぐに男性と距離を取りナイフを構え直す。
警戒心ＭＡＸ状態

どうしよう……とりあえずナイフ構えちゃったけど大丈夫かなぁ
本当は普通に話して帰るのに協力して欲しいんだけど…
勢いで構えちゃったよ、これじゃあ警察呼ばれて御用かなぁ……
なんて考える。

「えっと、警戒しないで欲しいな、何もしないから。ただ、様子を見に来ただけだから、」
おじさん、それはそれで怪しいよ…。
勝手に「おじさん」と名前を付けて、様子を伺う。
ナイフは一応未だ構えている。
おじさんの服装はよくあるＲＰＧの村人の格好をしている。
ここって本当に日本なの？もしかしたら外国とか、でも日本語を話していたし、
そんな事を考える。
ドアから今度は女性がやってくる。
「あなた、何してるの？裏で話聞いていたけど、言い方が怪しいよ。あの子も警戒してしまっているよ」
どうやら警戒する必要は無かったらしい。
ナイフを下ろす。
とりあえず話を聞く事にしよう。
本当に大丈夫かなぁ

2話「私の荷物はどこいったの?」

やってきた女性の話によると私は山道の途中の木の元に倒れていたらしい。
とりあえず「やってきた女性」だと個人的に分かりずらいので「おばさん」と（勝手に）命名する。
話を戻そう（ルシフェル）
それを見つけたおじさんがここまで運んで来たらしい。

「そういえば私の荷物は?」

この空間の何処にも鉄道旅で使っていた荷物（リュックサック他）が見当たらない。
「荷物は「見つけた時から」無かったよ」
「え?」
思わず間抜けな声を出す。
言われてみれば腕につけた黒い腕時計は無くなっていて代わりに緑と黄色のミサンガが結んであり、身に付けていた服は白いワンピースのような服に変わっている。

ん？ワンピース？

それってあの女性が着るワンピース？

てか気にしなかったけど地味に声も高い。

そしておじさんとおばさんより背が低い。

もしかして……

私……

「女の子になっていませんか?」

「「あなたは女の子よ、「見つけた（出会った）時から」」」

「えぇ……」

混乱してきたので今までを少し振り返ろう

私は○月○日に鉄旅を行なって次の日、○月□日午前2時に家に帰ろうと駅前の歩道を歩いていた。

そこにプリウスが信号無視をして、深夜テンションで煽ったらプリウスに多分引かれて、気がついたら森にいた。

その時はまだ「男子」高校生で服装も変わっていなかった。

日が明けるまで怪我をした状態で歩いて行って

どこかの木の下に倒れかかって意識を失う。

そして目が覚めたら森で着ていた服、荷物は無くなって、代わりに白いワンピースを

着ていて、「女の子に」なっていた。

まとめても意味がワカラン
多分気絶した時に何かが起こってこうなったと思う。

「そういえば貴女、名前は？」
おばさんに名前を聞かれる。
名前か、男性だった時の「光（ひかる）」でも良いがどうせなら変えたい……
「私の名前は光（ひかり）です！」
変えようと思ったけどあまりに名前を変えてしまうと名前呼ばれた時気がつかないかもしれないので少しのアレンジ程度にする。
「それじゃあｈｉｋａｒｉ（ヒカリ）ちゃんね」
なんか発音に違和感があるけど気にしない事にする。
「すみません、そういえばここってどこですか？」
家に早く帰らないといけないので現在地を尋ねる。

「ここは商業が一番盛んな町、「レイの町」よ」
「えぇ……」

レイの町聞いた事がない。
日本語を使っているから外国、では無いと思う。
一番商業が盛んな町？　一番商業が盛んなのは東京や大阪の事だと思うのだけど……

3話「異世界にお父さんとお母さんが出来ました！」

「ここの国の名前は何ですか？」

町名は分かったけどここが本当に日本なのか心配になってきたので一応国の名前も聞いておく。

「国？何それ」

以外な答えが帰ってくる。

国の存在を知らない？一応日本国という名前はほぼ全ての日本国民が認知していはずだ。

「それでは「札幌」「東京」「名古屋」「大阪」「高知」「福岡」は知っていますか？」

「Ｓａｐｐｏｒｏ」？「Ｔｏｋｙｏ」？「Ｎａｇｏｙａ」？「Ｏｓａｋａ」？「Ｋｏｕｔｉ」？「Ｈｕｋｕｏｋａ」？何それ誰かの名前？」

一応どれかは知ってると思う北海道、本州、四国、九州の有名な都市を挙げてみる。

だけどどれも知らない。

ここは日本では無いらしいですね……じゃあどこなの？

もしかして、今流行りの異世界ってやつですか?

やったぜ（自己解決）

「Ｈｉｋａｒｉちゃんの家はどこにあるの?」

再びおばさんから質問が投げられる。

「（多分この世界に）家はないです、（実質）孤児ですから」

異世界だと勝手に認識して話を進める。

「そうなのね（そっか）」

おじさんおばさんが悲しそうな目で見てくる。

なんか虚しい。一応元の世界だとめっちゃ充実してたのでそんな目はしないで欲しいのですが……

「少しごめんね」

そう言っておじさんおばさんが部屋を出て行く

少しリラックスする。

数分後おじさんおばさんが真剣な顔で部屋に戻ってくる。

「あのねＨｉｋａｒｉちゃん、貴女がもし良ければ、私達の「養子」になる気はないかしら？」

「・・・・・・」

少し考える

養子になったらこの世界での行動に一人で動くよりより動きやすくなるし、もし帰る方法が見つからなかった場合も今後安心して生活する事が出来る。

だけどそうなると本当の親を裏切るようにも感じる。

親への裏切りは出来るならしたくはない。

しばらく考える

出来るなら1日くらいの時間が欲しいが今の私はおじさんおばさんの親切心でここにいる。おじさんおばさんには迷惑はかけられない。そのおじさんおおばさんにナイフを向けた人が言うセリフでは無いけど……

早く決断を出す必要がある。

「よろしくお願いします」

おじさんおばさんに頭を下げて言う。

おじさんおばさんは「パァ」っと顔が明るくなった

「それじゃあ私の事はお母さんと呼んで!」

「私の事はお父さんと!」

少し興奮気味に言われる。

「分かりました、お義父さん、お義母さん」

再び顔がパアッと明るくなる。

「よし、そろそろ時間だしご飯にしよう!」

そうお義父さんは言う。

夕食は普通の家庭料理でした。

４話「やっぱり平和が一番!」

お義父さんお義母さんの養子になって数ヶ月が立つ
お義父さんお義母さんの事を「お義父さんお義母さん」と呼んでいるのは
本当の親を裏切っていないと言うせめてでもの感情の表れだったりする。
後、養子になってから数日後辺りから、ほぼずっと図書館?らしき場所で本を読み漁っている。
なぜかは元の世界に帰る方法を見つける為だ。
そして、本を読んでいて分かった事は主に３つ
・魔法がある（ここ重要）
・モンスターやエルフなどのファンタジー要素が無い。
・国と言う概念が無い。
これだけ
魔法の転移とかで帰れるかと思ったけど転移魔法は上級魔法らしくコストは魔術士一人の命相当らしい
しかもこれで大体横浜～東京間をを転移するくらいらしい。

異世界に転移となれば一体何十人、いや何百人もの人達の犠牲が必要だろう。
たった一人の転移に代償が大き過ぎる。
理論上は可能らしいが却下だ。

次にモンスターやエルフがいない事
コレは少し助かった感がある、エルフはいて欲しかったがモンスターがいたら森にいた時点で襲われて死んでいたはずだ。
この世界には人間と元の世界で一般的知られている豚、牛、鶏などの動物が住んでいるらしい。
良かった、異世界限定の変な生き物で出来た変な料理は食べたくは無い、絶対に。

国と言う理論は無くて争いをする時も町と町、町と村、村と村で行っていたらしく
現在は争いはほぼ無く平和に暮らせるらしい。安心した、やっぱり争いは無いのが一番だ。
そして争いをしていた関係か町の敷地は城壁の様な壁で囲まれている。だけど今は争いはほぼ無いので拡張する為に壁を壊して、その影響か統合しそうになってる町もあるらしい（ある意味弱肉強食みたいな所がありそう…）

本などを読んでいて一つ気になった物がある。
それはこの「まちかんいどうのこうちつかについて（町間移動手段の効率化について）」と言う本だ
内容は「町間移動の手段が徒歩以外無いから私が考えてみた」と言う物でコレで提案されたのが馬車らしい
そこから数年で馬車は世界中で使われるようになってそこから「移動は徒歩か馬車」になった。

鉄道は無いの？

鉄道とは…
レールを引いた線路上を車両が走り、旅客・貨物を輸送する運輸機関
徒歩、馬車より少ない人員で大量の物資、乗客を運搬する事が可能
専用の設備が必要で設備には大量の資金、物資が要求されるが完成した場合の恩恵はとても大きい。
簡単に場所変更などは出来ないので敷設場所はよく考えないと大変な事になってし

まう。

調べた結果、鉄道はありませんでした。

何でや！何でないの!?私の好きな鉄道が無い世界なのか……

こうなったら「自分で」理想の鉄道を作ってやる！

学校生活編　入学

5話「学校に通いたい！」

自分で理想の鉄道を作るとは言ったけど方法が無い。
鉄道には知識と人脈と莫大な資金と土地が必要不可欠だ。
鉄道に関する知識はあるだけどそれ以外は一つも無い。
とりあえず今日は帰ろう。

家に帰る
「ただいま、お義父さんお義母さん」
「お帰りｈｉｋａｒｉちゃん」
「お帰りｈｉｋａｒｉ」
「今日もあそこに行っていたの?」
「うん、調べたい事があって」
「何を調べているんだ」
「秘密!」

元の世界に帰る方法を調べている事は親には秘密にしている。
一応親になるけど他人と言えば他人だ。
迷惑はかけられない。
だけど方法が見つかって元の世界に帰る一週間前くらいにはこの秘密を明かすつもりだ。

数十日後
鉄道を作ると言って数十日あれからほぼ変わらずに図書館みたいなところで資料を漁って
家に帰って紙に設計図を書いて行く
この作業の繰り返しだ。
この世界には電気はあるが電車を走らせられる直流１５００Ｖの強力な電力は無いしそもそもモーター自体も無い
だから現段階で電車を走らせるのは無理だ（出来るとしても開発期間と資金が足りない）
だから作るのは「蒸気機関車」を予定している。

蒸気機関車
蒸気機関を搭載した自走する事が可能な車両
水を火で沸騰させて沸騰して出来た水蒸気をシリンダーに入れてシリンダーの中にあるピストンを押す事で車輪を回して動く仕組み
幸いに蒸気機関車の仕組みは前の世界にあった「これで完璧!蒸気機関車の仕組みと秘密特集ＤＶＤ」を使って熟知しているので設計図に書き出すだけだ

〜〜

ある日　自宅にて
テーブルに座ったお義父さんが話かけて来た。
「ｈｉｋａｒｉ「学校」に行く気は無いか?」
「学校?」
学校か…一応高校までの勉強は出来ているから大丈夫だと思うけど私の思っている学校とは違うかもしれない、もう少し話を聞く
「学校って何を学ぶの?」

お義母さんが答えた。
「ｈｉｋａｒｉちゃん、この町が商業が盛んな町な事は知っているわよね」
「うん」
「町にはそれぞれ盛んな所があってそれをもっと伸ばしたいと町は思っているの、だから全ての町には学校があってそこで「技術、知識を学ばせて町に活かせる様にする」という取り組みなの」
「だから例えばここレイの町では「交渉術」などの取引関連を学べて隣のケイの町では木材の「加工術」などの林業関連を学べるの」
「……少し考えさせて」
部屋に戻り少し考える
この世界での「学校」はその町に必要な人材を育てる場所
だから商人になりたいならレイの町の学校、金属加工工場員になりたいなら遠くのアルルの町に
行く必要がある。
行く学校によっては強制的に一人暮らしを強要される。
家を出ずに学校に通う場合はその町の学校くらいしか行けない
移動は１つの町の移動で約６～７時間かかるからとても大変だ……

考えているうちに眠気が襲い今日はそのまま眠りについた。

次の日

「おはようお義母さん、私、学校に行きたい」

「そう、どこの学校に行きたいの?」

「この町の学校に行きたい」

私がこの町の学校に行きたいと思ったのは鉄道を作るために必要な「資金」を確保するためだ

「交渉術」を身に着ければ値段交渉が捗ったり人脈を広げる事が出来ると思ったからだ。

お義母さんは私の回答に安堵する

「分かったわ、それじゃあ入学の申し込みをしなくちゃね」

「…でもその前に朝ごはんね、ｈｉｋａｒｉちゃん手伝ってくれる?」

「うん、分かった!」

こうして私が学校に行くことが決まった。

6話「元の世界にはこういう人いなかったよね」

学校に行く事に決めてから数日が立ち、手続きも終わり、今日から学校に行く事が出来るようになった。
もう今年の入学式は終わってしまったので転入生として入学する。
入学試験とかは無かった。良かった、正直設計図ばかり書いていて勉強は出来なかったからこれで難しい問題とかが来たら即落ちる事になる。
髪を整え義両親と朝ごはんを食べる。
女性になって髪は伸びたけど支度はあまり変わらない
髪は邪魔になるので結んでポニーテールにしている。
朝ごはんを食べ終わったら制服に着替えて家を出る。
通学路を歩く、現在では慣れたが元の世界の時には想像も出来なかった街並み。

数十分後、学校に到着する。
以外に距離があり少し疲れた。
校舎はどこか見たことがあるような建物でとても大きい

事前に貰った学校の校内マップを見ながら職員室に行く

下駄箱と職員室の距離は近く直ぐに着く。

「失礼します」

「どうぞ」

「今日からこの学校に転入します、Ｈｉｋａｒｉです」

「あぁ、君がか、どうもはじめまして今日から君の担任になる「ｉｔｕｋｉ（イツキ）」だｉｔｕｋｉ先生と呼んでくれ」

「はい！ｉｔｕｋｉ先生、よろしくお願いします。」

「それでは教室に行こうか、君の教室は2階にある「１―３」になる、案内しよう、付いて来てくれ」

「はい」

職員室を出て階段を上がり少し歩く

「ここが「１―３」だ覚えておいてくれ」

「私は先に入るけど、ｈｉｋａｒｉさんは私に呼ばれたら教室に入って来てくれ」

「分かりました」

そう言ってｉｔｕｋｉ先生は教室に入っていった。

少し騒がしかった教室は先生が入ると静かになり先生が何か話している。
数分待って教室から「入って来てくれ」と言われドアを開けて教室に入る。
教壇に上がり教卓の隣に立つ
「えー今日から皆さんとクラスメイトになる「Ｈｉｋａｒｉ」さんだ」
「はじめまして「Ｈｉｋａｒｉ」です！よろしくお願いします」
「えーと席は、あそこだな、Ｈｉｋａｒｉさんあそこの空いている席が君の席だ」
「はい、分かりました」
「それじゃあ授業を始めるぞ～」
こうして学校に転入する事が出来た。

放課後
「ねえ、Ｈｉｋａｒｉさんって彼氏さんとかいるの？」
「どうして入学から少し経った今に転入したの？」
「好きな食べ物は？」
「どこから来たの？」
授業が終わった瞬間に質問責めに合う

「えっと…そのぉ」
　こんなに質問に合うのは初めてで戸惑ってしまう。
「ちょっと、Ｈｉｋａｒｉさん困っているよ！一問ずつ質問するようにしようよ」
　クラスメイトの女子生徒が助けてくれる。
「ありがとう助かったよ、えっとあなたは」
「私は「Ｙｕｉ（ユイ）」よろしくねＨｉｋａｒｉさん」
「よろしく後、私の事は好きに呼んでいいよ」
　友人関係は早い内に作っておいた方がいい、こうして明るく振る舞って印象を良くする事も重要だ
「あ！もうＹｕｉが転入生と仲良くなってる！いいな、俺とも仲良くしてよ！」
「いいでしょ別に！Ｈｉｋａｒｉちゃんと仲良くなろうが勝手でしょ！」
　Ｙｕｉと男子生徒が言い争いをしている。そういえば元の世界では無かったな
「えっとＹｕｉさんこちらの方は…」
「あぁ、コイツは「Ｋａｉ（カイ）」残念ながら私の幼馴染よ」
「コイツとも残念とも言うな！あ、どうもＫａｉです！どうぞよろしく！」
「よろしく、私の事は好きに呼んでいいよ」
　こういう人も元の世界にはいなかったよね。なんだか新鮮！

その後は質問にある程度答えて今日出来た友人、ＹｕｉとＫａｉとの３人で帰りました。

学校生活編　文化祭
7話「文化祭の準備って楽しいよね」

学校に通いはじめ数ヶ月後……
登校中…

「そういえばそろそろ文化祭だな」
「そしてその後は……」
「「夏休み！」」
「…へぇ～夏休みがあるんだ」
てか異世界にも文化祭とか夏休みがあるんだ…
夏休み……毎年青春１８切符を使って色んな所に行っていたなぁ～
「で、Ｈｉｋａｒｉちゃんは夏休みどうするの？」
「え!?、私は…やりたい事があるからそれをやる事くらいかなぁ」
「えー、それは土日でも出来る事でしょう！なんか…「夏休みだからこそ出来る」事をや

ろうよ！」
「夏休み……旅行とか、海とかかな」
「海か～ここ内陸側にあるから少し厳しいかなぁ」
「じゃあじゃあ山は！」
「山か、いいねキャンプとか楽しそう！」
「…てか！その前に「文化祭」でしょう」
「そうでした…」
「文化祭、うちのクラスは何をやるんだろう？」
「それは今日の授業で決める事でしょう」
「そうだね」
　そう話ながら学校に行く

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～

「今日は、近々行われる文化祭の出し物を決めるぞ～、何か案はないか」
「演劇がいいです！」
「はいはい！お化け屋敷がいいでーす！」
「展示館で良くなーい」

…………（ワイワイガヤガヤ）

……（ワイワイガヤガヤ）

「静かに！それでは順番に言っていって下さい」

「結構出たな……出し物は多数決で決めるぞ～」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「一番多かったのは売店か…それじゃぁ何を売るか決めるぞ」

その後、話し合いには数十分かかり、結果は「焼きそば」に決まりました。

～放課後、下校中～

「焼きそばか～、俺好きなんだよなぁ～」

「へぇ～好きなんだ、焼きそば」

「そういえばＨｉｋａｒｉの好きな食べ物って何？」
「あ、私も知りたい！」
「今まで話題に出なかったからね、私はプリンとマスカットが好きかな」
「プリンは甘くて美味しいし、マスカットは一口で食べられてぶどうよりさっぱりした味をしているからかな」
「へぇ～、因みに私は、パフェとかの甘いの全部が好き！」
「Ｙｕｉはそういや食事に行くと結構な確率で甘いスイーツ食べてるよな」
「だって甘くて美味しいんだもん、食べちゃうのもしょうがないよ」
「そっか、俺にはあまり分からないな」
「そうなんだ、あ、もう着いちゃった、Ｋａｉ、Ｙｕｉ、それじゃあまた明日！」
「「また明日！」」

Ｋａｉ、Ｙｕｉと別れ、家に帰った後、自室に戻り鉄道車両の設計図を書いていく。
今書いている所は運転室部分、ここは機関士が乗車する位置なので出来る限り使いやすい空間にする必要がある。この世界は前の世界とは全く違うので、この世界に合う様に設計しなければならないので凄く悩む

そう悩んでいる内にもう夕食の時間になったので書くのをやめ、そのままご飯を食べて寝る支度を整えて今日は寝た。

８話「本当のお祭りみたい」

数十日後…

「今日は文化祭当日です、怪我とかしないようにしてください。」

「「「「はーい！」」」」

クラス全員が返事で答える

「それでは午前係の人は準備してください」

そうＩｋｕｋｉ先生から言われ

私、Ｋａｉ、Ｙｕｉ含め数人が準備を始める

「それじゃあ午前係の人よろしくー！」

「午後はアンタがやるんだからね～！覚悟してろよー！」

そんな会話も聞こえる

準備が終わり数分後

チャイムのベルが鳴り門が開く

売店は門の目の前に設計されているので文化祭の開始が直ぐに分かる。
門が開くと沢山の人が入ってくる。
町中の人達がやってるので当然混む、直ぐにお店に行列が出来る。
どのお店も同じようだ
元の世界の高校の文化祭は行列なんて何処にも出来なかったからこっちの学校も行列が出来る事は無いと思ったから立候補したけどこれはこれで大変だ。
「Ｈｉｋａｒｉちゃん、列をもうちょっとこっちに並ばせて！」
「はーい、すみません、もうちょっとこっちに移動をお願いします」
以外に大変だ（大事な事なので２回言いました）
～～時は流れ１２時ちょうど～～～～～～～～～～～～
「Ｈｉｋａｒｉちゃん、前半終わったから交代しに来たよー」
「ありがとう！○○さん！」
文化祭午前の部が終わり交代の時間になったのでＫａｉとＹｕｉがいる場所へ行く
「Ｋａｉ、Ｙｕｉちゃん、お疲れ様！」

「Ｈｉｋａｒｉちゃん！お疲れ様！」
「お疲れーＨｉｋａｒｉ」
「大変だったね～疲れたよ～」
「そうだねーこんなに人がやってるとは思わなかったよ～」
「めちゃくちゃ疲れたから、少し休憩した後で文化祭回ろうぜ～」
「「さんせ～い」」
　数分後、
「回復完了ー！」
「私も回復完了ー！」
「私もー」
「それじゃあ文化祭回ろうぜー！」
「「はーい」」
「最初あそこ行こうぜ！なんかやってる！」
「いいねー行こう行こう！」
「私はＫａｉ合わせるよ」
　私はノリノリだけどＹｕｉはどうやらまだ少し疲れているらしい
「おぉボールすくいに輪投げ、他にもいっぱいある！面白そう、やろうぜ！」

行ってみた教室でやっていたのはお祭りの売店に良くあるミニゲーム達
本当に文化祭じゃなくてお祭りみたいだな……
「すいません、3人分お願いします。」
「それじゃあ胴貨6枚ね」
「これでお願いします」
胴貨6枚を受け付けの人に渡す
「ちょうどね、まいど！」
そう言われ券を9枚枚渡される
この券で1回出来るらしい
「一人3枚だね」
「俺アレやりたい！」
「じゃあまずはそれね」
やって来たのは輪投げ、券を1枚渡し輪を3つ貰う
マトには得点が書いてあってその得点を競い合うものらしい
結果、
Ｋａｉは「2、1、0」で3点
私は「2、1、1」で4点

Ｙｕｉは「３、１、２」で６点
「すごいね！Ｙｕｉちゃん！」
「３点って以外に難しい位置にあるよな、俺は外れたよ」
「私は届きそうになかったから最初から諦めてたよ」
「ありがとう、嬉しいよ」

「それじゃあ次はあの「輪ゴムシューティング」てのをやろうぜ！」
さっきと同じで券を渡して４本の輪ゴムと輪ゴム銃を貰う
輪ゴムシューティングは輪ゴムを使ってマトを撃ち落とすゲームらしい
景品は手作りお菓子だ
結果は全員３つ落とせた
それぞれお菓子を２つ貰った
「マトをどれだけ落としても２つなんだな」
「２以上はお菓子２つで２つ未満はお菓子１つらしいよ」
「まぁそうしないと結構な格差が生まれる可能性があるからね」
「そっか、そうだね！」

「最後はー、アレだー！」
「３つともＫａｉが決めちゃったねー」
「ねー」
　最後はボールすくい
　ポイを使ってボールをすくうゲームだ
　最後の券を渡しポイと器を貰う
　結果は、
　私とＫａｉが３つでＹｕｉが４つ取れた
「なんかＹｕｉが今回めっちゃ得点とかとっているよな、もしかしたらそういう才能があるんじゃねえの？」
「確かに、そういうのありそう！」
「んー、私は良く分かんないや」
　そんな会話をしながら教室を出た

9話「こっちの世界でも長いんだね…」

教室を出て数分歩く

「お、あの教室なんか面白そうな出し物出しているな」

そう言ったＫａｉが指した先は「お化け屋敷」

お化け屋敷ってこっちの世界にもあるんだ（絶望）

この異世界、なぜか娯楽関連と食関連「だけ」は充実している。

なぜだ（意味が分からない）

そして私は性別が変わる前から「怖いのが苦手だ」……

「ねぇＫａｉくん、ここに行くのはやめない？」

「ん、どうしたＨｉｋａｒｉ？いつもと違って「くん」なんて付けて？」

「ナ、ナンデモナイヨ。トリアエズココニイクノハヤメヨウカ。」

「なんでカタコト？」

「まぁ何でも無いなら早く入ろうぜ！」

そう言ってＫａｉとＹｕｉは受付の人にお金を渡して中に入ってしまった。

仕方なく私も受付の人にお金を渡して２人に続く

てかＹｕｉは怖いの行けるんだ……もしかしてこの中で怖いの私だけ？……

この先ダイジェスト

「ギャー！」
「キャー！」
「もうやだー！」

数分後、お化け屋敷を出た
「入ってからずっとＨｉｋａｒｉちゃん悲鳴上げていたね…」
「ごめんなさい、でもとても怖くて……」
「まぁ確かに結構クオリティ高かったよなぁ～、俺も少し驚いた所があったし…」
「次行こっか」
「うん」

また数分歩く……
「ねぇ、私あそこに行ってみたい」
「Ｈｉｋａｒｉちゃんが提案するなんて珍しいね、えっとここは「展示会」をしているら

しいね」
「Ｈｉｋａｒｉが提案したやつだし、なんかすごい物が展示させているんじゃね」
「とりあえず行ってみよう」
　教室の中で展示されていたのはレイの町の縮小模型が展示されていた。
「おぉ私達の町だ！」
「学校に、中央広場、俺の家もあったぞ！」
「本当だ、私の家もある」
「私のもある」
　３人で自分の家の場所を探す
　ところでこの作品の作者は誰だろう？是非仲良くなっておきたい（建設関係で）
　近くにいた先生に尋ねてみる
「すみません、この作品を作った人は誰なんですか？」
「あぁこの作品はクラス全員で作ったんだけど企画、設計をしたのは「Ｋａｎａｔｏさん」だよ」
「へぇ～、ありがとうございます！」
　Ｋａｎａｔｏさんか……今はいないらしいからまたいつか教室に尋ねに行ってみよう。

「Ｈｉｋａｒｉちゃん、そろそろ次に行こうか」
「はーい」
Ｙｕｉに言われ教室を出る
その後、２日目も他のクラスを周り……文化祭は終わり、
学校生徒全員でホールに集まって学校長の話を聞く
そういえばこの学校の学校長にあった事がないな…そう思いながら一番前にある台を見る
「それでは学校長のお話です」
アナウンスの先生に言われ一人の先生が台に上がる
学校長先生は男性で眼鏡をしており、おっとりしている。
「今日は文化祭最終日、皆さんは楽しめましたか?私はこの２日で全てのクラスの出し物を回りました。
出店で料理をやっていたり、このホールで劇をしていたり、小さな町を作った教室もありました。
それぞれがこの文化祭を盛り上げようとしている努力はとても良く伝わりました。
その他に……中略……
……明日からは普段どおりの学校生活に戻ります。気を引き締めていきましょう」

やっぱりどの世界でも学校長先生の話って長いんだ（足が疲れた）

その後、クラス全員で簡単に後片付けをして３人で話しながら帰りました。

学校生活編　夏休み

１０話「前の世界ってめっちゃ楽だったんだね…」

文化祭から数日が経ち、今日で夏休み前最後の学校が終わる。

〜〜〜〜登校中〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「ねぇ今日は授業が無いらしいよ」
「え、本当か！本当なのかＹｕｉ」
「でもその代わりに大掃除があるんだって」
「えぇ〜俺授業も掃除も面倒だから嫌いなんだけど〜」
「まぁ仕方ないよ、Ｋａｉ」

〜〜〜学校・教室内〜〜〜

「今日は授業はありませんが代わりに大掃除があります。
ここからここまでの人は窓掃除、ここからここまでの人は床掃除、ここからここまでの人は廊下掃除で残りの人は黒板と棚をお願いします、それじゃあ最初はみんなで机を

移動させて下さい。」

「「「「「はい」」」」」

先生の指示通りにクラス全員が移動を開始する。

掃除は前の世界の大掃除と内容ほぼ同じで

違いは前の世界より掃除する場所が多いのと粉洗剤が無い所くらいだ

粉洗剤が無いので汚れが直ぐ落ちない、時間と体力が少なくなってくる

「先生！ここの汚れが落ちないんですけど、どうすればいいですか？」

「とりあえずそこは全体をやった後でやってくれ」

「はーい」

他の人も苦労しているらしい。

数時間後……

「終わったーーー！」

「そこ、うるさいぞ」

「はい、すいません」

掃除が終わりＫａｉが叫ぶとｉｔｕｋｉ先生が注意を入れる。
「そんじゃあ全員集まれ、これからホールに全員で行って学校長先生の話を聞いた後に帰ります。」
「「「「はい」」」」

返事をしてホールへ
ホールには数人の先生と３～４クラスが既に並んでいた。

数分で学校生徒全員が揃い先生が司会を始める
「全員集まったらしいので、開始します。最初は警備隊の人の話です」
この世界には警察は無く代わりに町が雇っている警備隊の人達が警察の役割を果たしている。
前の世界にある「学校に来て（夜遊びなどをしない様に）注意喚起をする警官さん」は「学校に来て（町の印象を悪くしない様に）注意喚起をする警備隊の人」に置き換わっている。
この世界は「悪い子供を作らない」の所は一緒だが「子供自身の為」では無く「この町の為」と少し違う。

後、やっぱり話の長さは前の世界と変わらんわ（立っているの辛い）

数分後、警備隊の人の話が終わり次は学校長先生の話だ……あの、これ以上立っているのはきついんですが……

「○○が○○で○○でありまして○○が……（その後余り覚えていない）……であるので気をつけて夏休みを楽しんで下さい。」

「これにて終わりにしたいと思います。右端のクラスから自分のクラスに戻って下さい。」

やっと長い話×２が終わり、教室に帰る。もう疲れた……家帰ったらベッドで寝たい。

そう思いながら教室に帰って荷物を取ってＫａｉとＹｕｉと帰る。

「警備隊の人と学校長先生の話長かったな、もう疲れたよ」

「そうだね、でも大切な話だったんだし…」

「Ｙｕｉは真面目だなぁ～俺は無理だよ～」

「私も無理…重要な話だと分かってはいるけど足がもう痛くて、座る事が出来れば良

かったけど」
「だよなぁ～やっぱりＨｉｋａｒｉは分かってくれるか～」
「まぁ確かに座れればとても楽になりそうだね」
「学校長先生に申請してみる？」
「「いやいや！無理だよ！」」
「そっか、残念」
そんな会話をして家に帰りました。

11話「少し酔いそう…」

夏休みが始まり数日……

「良し！出来た！」

明日はＫａｉとＫａｉの両親とＹｕｉと私とお義父さんの計６人で町の外にある山でキャンプをする。

その為に今日は準備をして現在丁度終わった所だ

その後は夕飯食べて寝る支度をした後、今日は何もせずに寝た。

次の日

「Ｈｉｋａｒｉー来たよーー！」

「うん！今行くー」

そう言いＹｕｉ達が乗って来た馬車に荷物を乗せる。

この世界には車はないので町がやっている馬車をレンタルしている。

購入する事が出来るが維持費、場所を取るので大体の住民はレンタルを使っている。

数分で荷物が積み終わり馬車が動き出す。
まだ町中なので速度をゆっくりになっている。
見えて来た町の門を抜け道に出る。
道は砂を撒いて作った簡単な物
馬車が速度を上げる
結構揺れる。
この世界には緩衝材などは一切無いので衝撃がダイレクトに伝わる。
少し酔いそう……
数十分後、川岸のキャンプ地に到着。
まずテントを２つ立ててそこを仮更衣室兼寝所にする。
テントに入り水着を着る。
水着は前日に購入済みで着る方法はお義母さんに教わった。
男子だった頃は興奮していたと思うけど
女性になってからは女性に興奮しなくなり男性には今まで通り欲情せずで結構中途半端な感じになっている。

水着への着替えも終わり思いっきり遊ぶ。

とても楽しい
川の流れは穏やかで水位は胸したくらいあり飛び込みも可能だ。
追いかけっこしたり、水を掛け合ったりする。
前の世界ではこんな川は行った事が無かったからとても新鮮
海では無いので水はしょっぱく無いし上には木が日差しをある程度防いでくれるので日焼けの心配はほぼ無い。
とても快適。
日が落ちて来たので川から上がり身体を拭いた後、夕食の準備をする。
夕食はバーベキューを行う。
軽く整地した後石で囲いを作って木材と炭と「魔石」を入れる。
この世界には魔石が存在する。
属性は火、電気、水、風、光の良くある5属性だ。
魔石は鉱山で大量に取れるので重宝されている。
どの魔石も0から1では無く
1から3みたいな感じで元の物を増やす役割をしている。
この世界では火の魔石は着火剤のような役割をしている。
準備が終わったらマッチを付けて火の魔石に火を写して燃やす。

良く燃えている。
金網を上に被せ、食材を焼いて行く。
「おぉ～燃えてる！燃えてる！」
Ｋａｉが楽しそうに見ている。

数分で焼き上がりみんなを呼ぶ
「ご飯出来たよー！」
「「「はーい」」」
バーベキューを開始する。
「うんめー！」
「美味しいねー」
「そうだね！」
それぞれ感想を言って行く。
結果、バーベキューは成功して、とても楽しい思い出になった。
「「「ごちそうさまでした」」」
バーベキューが終わり方付けを始める。
炭の火を消して馬車に乗せ魔石は着火剤とは違い一応「石」なので再利用が可能なの

だ。なのでこれも馬車に乗せる。

本で調べた方法で方付けて終わったらテントの中で寝る。

川で遊び疲れていたので直ぐに寝る事が出来た。

１２話「なんか中途半端な感じ～」

次の日、朝……

「おはようございます（小声）」

昨日は疲れていたから直ぐに寝る事が出来たけどベッドとは違い動きが制限されるので長く寝れず

みんなより早く起きてしまった。

外はもう明るくなっていて夏なのに結構涼しい。

隣にはＹｕｉが寝ている。ここは女子専用テントにしているのでＫａｉと父親組は隣のテントの中で寝ていると思う。

隣のＹｕｉの寝姿に可愛いとは思ったけど興奮はしなかった、この身体になってから同性になった女性には興奮しなくなり元同性現異性の男性には今まで通り興奮しない中途半端な感じになっている。

なのでアニメみたいに自分の身体を見て興奮とかはしない。

一応見た事あるけど「それが？」みたいな感じだった。

てか自分に興奮って何？ナルシストなの？って思った。

誰も起きていないしやる事も無いで暇なので外に出て見る。
空は雲一つ無い晴天で太陽も完全には出ていなくて、風が吹いている。涼しくてとても快適。
川岸にあった大きな石に座り川を眺める。
川の流れは穏やかで昨日にはいなかった魚が川の流れに逆らって泳いでいる。
何も考えずに見る事が出来るので暇つぶしには丁度いい。

体感時間数分でＹｕｉがやってくる。
「おはよーＨｉｋａｒｉ、早いんだね、起きるの」
「おはよう、Ｙｕｉ、私、ベッドじゃないとあまり眠れなくて」
「分かる、寝袋ってなんか慣れないよねー」

二人でそんな会話をしていると次々にテントから出てくる。
「おはよーＹｕｉ、Ｈｉｋａｒｉ、早いなぁ～起きるの」
「「おはよーＫａｉ」」
「おはよう、Ｈｉｋａｒｉ、Ｙｕｉちゃん」

「おはよう、お義父さん」
「おはようございます、Ｈｉｋａｒｉのお父さん」
数分後、全員起きたのでそろそろ朝食を作り始める事にする。
この後町に帰る予定なので簡単に済ませられる物にする。
パンにバターを塗ってその上にレタス、ハム、チーズを乗せる。
最後はパンを乗せ２つに切ったら完成、作ったのは「サンドウィッチ」
簡単に作れると言う理由でこれにした。
テーブルに運んで食べ始める
「「「「いただきます」」」」

数分で食べ終わり、後片ずけをして馬車に乗り込む。
昨日のキャンプよりは楽に終わった。
全員乗り終わり馬車が動き出す。
川岸の小石道を抜け砂で軽く整備された道を進んで行く。
馬車に揺られ数十分後、ようやく町に到着。
門を通過して進んで行く。

ここからは道が石になるのであまり揺れずに行ける。
直ぐに私の家に着き荷物を下ろしてＹｕｉ、Ｋａｉ達と別れた。

学校生活編　技術伝授
１３話「やっぱり転生ってチートだと思う」

「皆さん、おはようございます。今日から学校が始まります。
まだ夏休みの気分が残っている人は出来るだけ早くこの学校がある日常に戻って来て下さい。
その他にも……」

今日は夏休み明け最初の学校、キャンプ終了後、残りは宿題を終わらしたり、設計図書いたり、町の本が置いてある所に入り浸って本や資料を読み漁ったりした。やっぱりこの世界でも夏休みはあっという間に終わる。
宿題は量が少なめで内容も簡単だったので直ぐに終わった。
「学校長先生、ありがとうございました。それでは右のクラスから退場して下さい。」

学校長先生の話も終わりホールを順番に出る。
階段を上がり教室に入るとクラスメイトが話し始める。

「夏休み終わっちゃったね～」
「そうだなぁ、あーあ、もっと夏休み長くならないのかなぁ～」
「確かに～」
　ＫａｉとＹｕｉの３人でそんな会話をする。
　数分後、ｉｔｕｋｉ先生が教室に入って来て話を始める。
「静かに～、みんな席につけ～」
「えー夏休みが終わり学校が始まりました。これからの予定を説明しますまずこれから夏休みの宿題の収集をして、席替えを行います。その後は夏休みの間配れなかったプリントと返せなかったテストを返して今日は終わりです。えーそんじゃあまず夏休みの宿題を回収します、右前の人から出して下さい」
「「「「「はい！」」」」」
　返事をして順番に宿題を出して行く

　宿題を忘れた生徒が数人いたが宿題を（ほぼ）回収出来た。
　因みにＫａｉ、Ｙｕｉ、私の３人ともに宿題を提出出来た。

「よし、次はみんなお待ちかね席替えだな、席替え終わった後文句言ったら無かった事にするからそのつもりで」

「「「「え～」」」」」

「それじゃあ始めるぞ、くじ箱からくじを引いて出た番号で席を決めるぞ、席の番号は黒板に描いたからそれ見て移動しろよ～」

「「「「「はーい」」」」」

さっきと同じ様に返事をしてくじを引いて行く。

結果私は「１０番」になった、今まで隣にいたクラスメイトに別れを言って黒板を見ながら１０番に割り振られた席に向かう。

「ここか…少し黒板から離れたなぁ～」

席に移動してそんな独り言を話す。

「あれ、Ｈｉｋａｒｉちゃん？もしかしてこの席になったの？」

「うん、そうだけどどうしたの？」

「やった！Ｈｉｋａｒｉちゃんの隣になったよ！よろしくねー」

「え！本当！こちらこそよろしくねー」

奇跡的に隣の席がＹｕｉになった、これはラッキー！

因みにＫａｉは２席離れた所に席替えした、だけど友人と思われるクラスメイトと楽しそうに話しているから多分問題無いと思う。
その後はいつもより多いプリントとテストを貰う
テストの点数を９６点、この世界の学校でやる内容は小学校～中学２年くらいまでをやるので余裕で高得点を取れる。やっぱり転生ってチートだと思う
テストを貰い終わったら挨拶をしていつもの３人で家に帰る。

そういえばなんか学校でやらないといけない事があった気がするんだけど…気のせいかな？

１４話「今更だけど先輩なんだ……」

はいはいはーい「名無しの音」だよー！

今回は、更新が遅れて本当に申し訳ありませんでした。

活動報告に書いた通りこの「「元」一般学生の鉄道建設記録」にあった誤字を（私が確認した中で）全て修正していたら遅れてしまいました。

タグに「不定期更新」を付けてはいますが、出来る限りは早め早めの投稿をして行く予定です。

これからもこの小説をよろしくお願いします。

それではどうぞ！

夏休みが終わり数日後、現在は昼休み、文化祭でレイの町の縮小模型が展示されていたクラス、「２―２」に来ている。

今更だけどＫａｎａｔｏさんって先輩なんだ……

ノックをした後、扉を開けて言う。

「すいません。Ｋａｎａｔｏさんいませんか？」

扉近くにいた男子生徒が少し驚いた後、言う。
「おいＫａｎａｔｏ！可愛い女子生徒がお前さんをお呼びだってさ！…畜生！羨ましい！」
可愛いと初めて言われる。少し照れる／／／
「おい○○、煽るなよ、俺もどうして呼ばれたか分からないんだから」
Ｋａｎａｔｏさんと思われる生徒が答えてこちらに近ずいて来る。
「……それで、君は？」
「あなたがＫａｎａｔｏさん、いえＫａｎａｔｏ先輩ですか？」
「そうだけど、先輩って事は１年生かな？」
「あ、はい！私、１―３のＨｉｋａｒｉと言います。どうぞ好きに呼んでください！」
「分かったＨｉｋａｒｉさん、それじゃあ今日はどうして俺を呼んだのかな？」
「それは文化祭の時、あなたのクラスがこの町の模型を展示していたじゃないですか、それで先生に聞いた時、考案者、設計者はあなただって聞いて…それで来ました！」
「あぁ、あれか！」
「はい！なので良ければその設計などの技術とかを教えて欲しくて……」
「う～ん。そっか…少し考えさせてくれないかな？」
「分かりました。それじゃあ明日も来ます。その時に返事をお願いします！」

「分かった、それじゃあ」
そう言ってＫａｎａｔｏ先輩は教室に戻って行った。
少し明日が不安だ。

～次の日～

１日が過ぎまたＫａｎａｔｏ先輩がいる教室にやって来た。
昨日と同じ様にノックをする。
「すいません、Ｋａｎａｔｏ先輩いませんか？」
昨日と同じく扉の近くにいた男子生徒が言う。
「おいＫａｎａｔｏ！昨日の女子生徒が来たぞー！行ってやれー！」
「分かったから！静かにしてくれ○○」
そう言ってＫａｎａｔｏ先輩がやって来る。
「決まりましたか？」
「あぁ、教える事にしたよ、君に」
「本当ですか！　それじゃあ日時はどうしましょう？」

「なら放課後はどうだ、申請すれば空き教室貸してくれるし」
「それにしましょう！それじゃあ放課後！」
「あぁ、それじゃあ放課後。」
そう言いＫａｎａｔｏ先輩は教室に戻っていった。
今から放課後が楽しみだ。

いかがでしたか？
やっと登場させる事が出来ました。
放課後の事はカットで行きます。ごめんなさい。
それでは次回！

１５話「名前は前の世界と変わらないだ…」

あれから数日後。
いつも放課後に教えてもらうようになっている。
場所は放課後の空き教室で３０分程、今まで書いている設計図も見せようかと思ったけどまだ秘密にしたいので見せてはいない。
そういえば私、この世界に来てから結構隠し事増えたよなぁ

現在私は中央広場から少し離れた倉庫に来ている。
目的はＫａｎａｔｏ先輩に教えてもらったイベントに参加するためでここで「技術の祭典」が毎年行われているらしい。
このイベントは７年前に馬車の論文が発表されたイベントでもあるので、
それから結構お偉いさんも注目されている結構重要なイベントだ。
鉄道の事もここで発表するのも良いかもしれない。　まぁまだ設計図完成してないから結構後になるかもだけど…

入口で入場料を払って入場。
中は証明で明るくなっており正面にステージがあって横には様々な物が展示されている。
「おぉ…」
思わず声が出る。
まだステージでは何もやっていなかったので最初は横の展示物から見ていく。
あるのはレポート文と分かりやすくするための模型や、実際に触れて体験する物もある。
とりあえず一通り回ってみる。
魔石の効率的な運用方法を調べた物や建築関連の物。
後は、馬車の乗り心地についてなどの何かの応用ばっかりで新規開発した物は無かった。
残念、てっきり沢山の新技術の発表があると思ったのだが……
「イベントにお越しの皆さん、これから中央ステージにて新技術、その関連の発表が行われます。

是非お越しください。」
そんな事思っていたらスタッフの一人がアナウンスをする。
この事を聞く限り新技術の発表はステージで一つずつやるらしい。
スタッフの方の話によると馬車の件で新技術は大事にされるようになり新技術は誰もが注目しやすくする為に一人ずつ、目立つステージで発表されるらしい。
これで新技術の開発が遅れたりしないかな？

後、ここで発表するのは辞めよう（ステージ立って発表とかどんな罰ゲームなの）

とりあえず中央のステージに集まる。
私が来た時には既に結構な人がいて前の人達が邪魔で前が良く見えない。
ここはこの身体を駆使して行こう。
女子体化してから全世界の時より小さくなったので大人の間と間をすり抜けて前へ行く。
子供の時にもやっていた事なので簡単に出来た。
あっという間に一番前に到着、やっぱ便利だわこの身体。

「それでは発表を開始して行きます。」
ステージに立っている司会者がそう言い始まった。
始まると早速一人の男性がステージに上がり発表を始める。
「えー今回私が発表するのはこれです」
そう言うとステージに台が運ばれるその上には…ん？……あれ「電話」じゃね？
台の上には2つの受話器見たいなのが銅線で繋がっている物が置いてある。
「これは、簡単に言うと、使えば遠くの人と会話が出来るようになる機械です。」
「これさえあればもう手紙などは要らなくなります！」
「原理は……」
その後原理を簡単に説明して行くが正直分からなかったのでカット。所々異世界特有の魔石とか言ってるし。
「…名前は……電気を使って話せる機械と言う事で「電話機」と言う名前にします！」
男性は高らかに言うと拍手が起き一部の人は「革命だ！今革命が起きたんだ！」なん

て叫んでいる。

まぁそれは認めるけど……てか名前は前の世界と変わらないだ。

その後も、いくつかの発表があったが……分からん事ばっか喋るので退屈になって電話の発表が終わって数分で帰りました。

学校生活編　卒業、そして成人へ

１６話「良い人すぎでしょ！」

電話が発表されてから約２年、電話は馬車の様に直ぐに町内、近隣の町に設置された。
理由は簡単で製作者、発表者である男性が電話の設計図を無償公開したからだ。
因みに馬車も同じように無償公開されている。
無償公開の理由は「これで世界がもっと便利になるようにする為」だそう
やっぱり元の世界みたいに設計図を売ってくれ、と言って来た人もいたらしいが断って公開したらしい。
良い人すぎでしょ！
私だったら無償公開は無理だわ
まぁ、電話の話は置いておこう。
あれから２年、何があったかを簡単に言うとＫａｎａｔｏ先輩が学校を卒業？してその後は何も無く２年なが流れた感じだそして今日は私の学年が卒業する時だ。
とは言っても卒業式は無く代わりになのか成人式がありそれが終われば学校は卒業した事になるらしい。

～成人式会場へ移動中～

「いや～もう俺達も成人か～」

「そうだね、あっという間だったねー」

「覚えてる？最初に私達とＨｉｋａｒｉちゃんとあった時の事？」

「おう！俺はこの間の時の様に思い出せるぞ」

「私も覚えてるよ！」

「そういやＨｉｋａｒｉ、あった時に比べて結構外見が変わったよな」

「あ、そういえば確かに！髪色が変わっているし……後胸も大きくなってるし。」

「なんかごめん…」

さっきでは言っていなかったがどうやらこの世界に来てから少しずつ体形、髪が変化していった。

髪色は黒から茶髪になって体形は胸が膨らんで男性っぽい女性から完全女性になった。

「そういえば成人してからはＫａｉ、Ｙｕｉはどうするの？」

「俺は決めてないんだよなーなんかどれも同じ感じで「これがやりたい！」って思えるやつがないんだよ」

「私も、決めてないけど、Ｈｉｋａｒｉちゃんは？」
「いや、私も決まって無かったから２人を参考にでもしようと思ったんだけど」
「そっか、それじゃあ３人同じ所で働く事とかが出来たら良いよね！」
「おぉ！良いなそれ！」
「私もさんせーい！」

その後も、３人で話している内に目的地の会場に到着した。

〜〜

「おはようございます。これからの流れを話させていただきます。
まずは、番号順に並んでもらい、目をつぶって順番にこの水晶に触れて頂きます。
後は、頭の中に質問が流れてくる筈です。その質問に答えて行けば「スキル」を入手出来ます。
それでは頑張って下さいね」

「「「「「はい！」」」」」

そこから番号順に水晶に触れて行き、スキルを入手して行き、遂に私の番になった。

水晶の前に移動して水晶に触れ目を瞑る。

「ん、…え？何ここ？」

何か違和感みたいなのを感じ目を開けてみると全面真っ白な空間が広がる。

そして目の前には真っ白な衣装を身に纏った女性が一人。

「ようこそ、「スキル付与の間」に、Ｈｉｋａｒｉさん、いえ…「小川　光」さん」

「えっと…貴女は？」

「私は……いわゆる「女神」です☆」

17話「…大丈夫かな？」

「私は……いわゆる「女神」です☆」
「は、はぁ…」
「本来なら転移した時に会う予定でしたが、こちらの都合で後にしてしまいました。すみません」
「いえ、謝らなくても結構です。…あの、出来ればでいいんですは…いくつか質問に答えてくれませんか？」
「あっはい、大丈夫ですよ」
「それじゃあまず何で私は転移されたんですか？」
「それはあなたがあの世界線から消える予定でしたのでどうせならと言う訳で消される直前で転移させました」
「じゃあ、元の世界には帰れますか？」
「それは無理ですね、残念ながら。戻る事は可能ですけど世界の修正力でどちらにしろ消されますし、身代わりを置いたのであなたはあの世界線では死んだ事になってます。」
一番気になっていた質問をするがもう死んでしまった事になっていて帰る事は不可

能。

辛いが受け入れるしか無い。とりあえず生き残った?訳なので今は置いておこう

「次に何で転移先では女性になっているんですか?」

「それは暇つぶ…いえ、世界の男女比のバランスを整える為ですね。それとあなたが付けてた荷物、服は世界のルールに則り等価物に変化しているので戻って来ません」

なんか今聞こえた気がするんだけど…大丈夫かな?

「あぁ!それよりも今は仕事をこなさないと!とりあえずスキルを選んで下さい!」

そう言い並べられたのは大量の文字。スキルの名前が表示されている。

「あの、本によるとスキルは神によって選ばれるか、数個のスキルから選ぶかのどちらかだった筈ですけど」

「あ、それはお詫びです。転移転生時に会えなかったので、どうぞお好きなのを1つどうぞ、時間はたっぷりあるので」

「あーはい、どうも」

好きに選んでいいと言われたのでとりあえず見渡していいスキルを探す。

イケメン、豊乳、料理成功率上昇など一部の方が欲しいと思われるスキルから異臭、不運などどう見てもいらないスキルまで数は大量にある。幸い時間は無限らしいのでゆっくり決める。

～～～

「えっ…何でめっちゃ悔しそうなの?」
「いえ、何でもありませんから……」
「そう? ならいいけど……それじゃあ付与するわね」
「お願いします」
　そう言うと女神様は目を瞑り何かし始めた。
「……はい! 終わりました」
「すいません、ありがとうございます」
「いえいえ、毎年やっている事ですから……ではそろそろ目覚めてもらいます」
「はい、ありがとうございました」
　そう言うと急に瞼が重くなり目をつぶった。

１８話「……つ!?」

どうも！「名無しの音」です！

定期と言っておきながら遅れて申し訳ありませんでした。
理由は書き溜め（１話）があって安心感でそのままサボってたのとＴｗｉｔｔｅｒが楽し過ぎたからです！
本当にすいません（定期的更新は無理でした）
あ、後主の住まい地域には台風の影響はありませんでした！
活動報告の方にも書こうと思ったのですが訳あって出来ませんでした。すいません
さてさて（話戻ーす）

今回で鉄道設立の鍵となる人物が登場します！
それではどうぞ！

次に目を開けるとそこは元の世界（異世界）で目覚められたらしい。
スキル付与は終わっているらしいし、水晶から手を離し列に戻る。
その後数分待ち、生徒が全員スキル付与が終わった所で再び司会者が話しだす。
「他にスキルを貰っていない方はいませんね……それじゃあ退場します。皆さま、祝福の拍手をお願いします」
そうして拍手の中退場し、その後は各々自由で…という感じだ。

～～～

丁度この会場は資料館には近いので寄って帰る事にしたのだ。
あ、ちゃんと親には言ってあるよ
「……っ!?」
突然道の真ん中で引っかかり転んでしまう
鞄の中身、設計図が散乱してしまう。
「すいません!」
慌てて設計図を鞄にしまう
早く片ずけ無いと設計図が流出してしまう…
直ぐに散らばっていたのを片ずけたのだが数枚足りない。

「大丈夫?はいこれ」
上を見ると帽子を深く被り髪を軽く結んだ女性が私の設計図を差し出している。
「すいません、ありがとうございます!」
設計図を受け取り鞄に戻してその場を立ち去る。
少し恥ずかしい。

○○「アレは何だったんだ？」

いかがでしょうか？
鍵となる人物、分かった方はいますかね？
まぁ明らかに分かる方の方が多いと思いますが……
それでは次回！

レイの町ーケイの町間
１９話「嘘の見分け方についても」

成人式が終わり2日後、現在私はこの町、レイの町の町長に呼び出しを受け、町長さんがいる役所みたいな所に来ている。
どうしてこうなったって？
私だって分からないよ、ただ家でごろごろしていたらいきなり兵隊さんがやって来て馬車に乗せられ連れ去られているんだもん。
「あの、町長さん、何で私は呼ばれたのですか？」
本当に何で呼ばれたのかが全く分からない。もしかして私、この町の条例に違反とかしちゃった？
「あら、敬語とかいらないわよ。気軽にＲｅｎａ（レナ）って呼んで」
「それではＲｅｎａさん、何で私は呼ばれたのですか？」
「んーとね、貴女この前、設計図落としたでしょ、なんかすごい色々と書かれてる」
「……いえ、私そもそも設計図持ってないですよ。確かに前に紙を落としましたけどそれは私の書いた「ただの絵」、落書きですから」

そう言うとＲｅｎａさんは笑顔から真顔になる。
一応バレるの防止とアイデアを盗まれないように出来るだけ漢字を使って書いたからこっちの世界の人達には図形と変な文字？が書かれた落書きにしか見えない筈だと思うんだけど…

「…Ｈｉｋａｒｉさん、私はレイの町の長になる前は商人だったのよ、だから商品の価値などを見極める為に様々な分野に手を出したんです。もちろん設計関連についても、…嘘の見分け方についても」
はいコレ絶対嘘ついたのバレテマスネー、多分今正直ニ言ワナイヨ後ガ無イヤツデスヨネー……はい、話します。
「……そうです。確かに私は設計図を書いています。……てかどうして落としたの知ってるんですか？」
「それはね、私はその光景を見ていて、拾うのを手伝うついでに内容を見たからなの」

…あれ？拾うのを手伝った？確か拾うのを手伝ってくれた人は帽子を被った女性ただ一人だったんだけど……いや、Ｒｅｎａさんとは見た目の印象が結構違かった筈だし？

「あの、Ｒｅｎａさん。失礼ですがあの時いたんですか？」
「あぁ！それはね。あの時は変装してたからなのよ」
そう言いながら帽子と髪ゴムを出し装着する。装着後の姿はあの時の女性に結構似ていた。
「本当は後メイクをすれば…あの時と一緒の顔でしょ？私はいつもこうやって変装して町を回っているの、メイクってスゴいわよね、ちょっと変えるだけで印象が全く違うんだもの」

わぁ…化粧ってスゴいんだなぁ（実感）……そして変装するのって憧れるな～

「……まぁこのくらいにして話を進めようか、Ｈｉｋａｒｉさん、今回貴女に来てもらった理由はね、私はその「設計図について知りたいの、後出来るなら設計図に書いてあった暗号について」も…」

２０話「あってはいけないからね！」

「私はその「設計図について知りたいの、後出来るなら設計図に書いてあった暗号について」も…」

「・・・」

出来るならもうちょっと後に発表しようと思ってたんだけど別に今公開しても問題は無いのでもうバラす事にした。

「分かりました。私が設計図に書いているのは「鉄道」と言う新たな「公共交通機関」です。これを使用すれば「馬車よりも少ない人員で馬車よりもずっと早く、大量の人、物資の輸送が可能」です」

「へー鉄道ねー。それで「コスト」は？」

「はい、まず大量の資金と土地、後車両と線路を作る為の工場とある程度の人員は必須ですね。これら以外にも必要なのはあります」

「……ねぇＨｉｋａｒｉさん、例えばその鉄道をレイの町と隣のケイの町を繋ぐ事って

可能？」
「費用、時間は掛かりますが可能です」
「うん、Ｈｉｋａｒｉさん、貴女にレイの町とケイの町までを鉄道で結んでくれない？人員と資金と工場はこっちでどうにかするから」
「……はい！分かりました！…後、人員の数人はこっちで用意しても良いですか？」
「大丈夫よ、それじゃあよろしくね！」
「はい！……失礼しました」
返事をして部屋出る。その後一旦家に帰り電話で連絡を取る。
「もしもし、ちょっとこれから中央広場に来て！以上！」
『え、ちょっと。どうｓ』

終わったらもう一人

「もしもし、ちょっとこれから中央広場に来て！以上！」
『おい！何があっｔ』

連絡が終わったら私も中央広場へ急ぐ

～～～

「へぇ、それでそのある事業って？」
「それはね、「鉄道」って言って（説明ｒｙ」

～～～

「……理由は?」

「それは式の時に「３人で同じ所で働きたい」って言ってたでしょ、それを実現する為とＹｕｉとＫａｉが私にとって一番信頼出来る人だから…かな?」

「俺は参加するぜ、面白そうだし」

「私も参加するよ、友人からの頼みなんだし」

「ありがとう!Ｋａｉ!Ｙｕｉ!」

その後、今後の事などを話して解散した。

明日からがとても楽しみだ!

２１話「よしっ、待って～」

～翌日～

「だーー!やってられるかー!俺は事務的な作業は苦手なんだ!」

「もーＫａｉ!そんな事言ってないで手を動かして!今は人手が足りないんだから!」

「ごめんねＫａｉ、２日後には私達以外にもやって来るから、だから今は頑張ろう?」

「うぐっ……分かった」

Ｋａｉ、Ｙｕｉに鉄道事業に参加してもらった翌日。早速私達は数人分のデスクと大量の書類が置かれた殺風景な部屋で３人で書類作業をしていた。この部屋はＲｅｎａさんの気遣いで役所の空き部屋の一つを貸してもらっている。いわば仮本社だ。

それと私が言った「２日後」というのは明日面接があるからだ。

いくら人手が足りないからと言って仕事が満足に出来ない人を雇う訳にはいかないからだ

因みに面接官は私とＹｕｉとＲｅｎａさんだ。

Ｋａｉはとりあえずで採用しそうで怖いので簡単な受付、案内を任せた。

「あぁ！そういえばそろそろ会議の時間だから行くよ！付いてきて！」
「分かった、行くよＫａｉ」
「あ、ちょっと待って！この書類終わらせてからで……よしっ、待って～」
会議室のある３階に移動する。因みに仮本社は２階にあったりする。

「「失礼します」」
会議室に入るとＲｅｎａさんと男性が座っている。
「おぉ、君達が鉄道事業のメンバーかな？」
「えっと貴方は？」
「彼は鉄道を引く事になったケイの町の町長の「Ｓｈｉｋｉ（シキ）」さんだ」
「どうも、Ｓｈｉｋｉと言う、よろしく」
「Ｈｉｋａｒｉです。よろしくお願いします」
「Ｙｕｉです。よろしくお願いします」
「Ｋａｉです。よろしくお願いします」

「それじゃあお互いの紹介が終わった所で始めようか」

「「「はい！（わかった）」」」

～～～

「……そうですね（？･∀？･）」

その後、仮本社に戻り書類作業を再開した

Ｋａｉが涙目で作業してたけどそれは内緒で……

２２話「ねえ、なんでー」

「それじゃあ出発しますよ」
　Ｓｈｉｋｉさんがレイの町に来てから４日目の朝、現在Ｓｈｉｋｉさんと護衛２人、私と２人の従業員と馬車に乗りケイの町を目指している。
　今日になるまでには会議を重ねたり数十人を雇用したりしたけどそれ以外特に無くカット（？）したよ
「もうすぐ町を出るよ」
　そう言われ外を見ると大きな門が目の前に見える。
　今までも何回か町を出た事はあるがその時に見る門より大きい。
「うわぁ…」
　本当におっきい…（語彙力低下）
　あ、いや…ちゃんとしなきゃ！今は従業員が見てるんだ。不安にさせないように頑張らないと…あれ？何で笑顔で私を見るの？ねぇ、なんでー
　門を出て広がるのは広大な平野。うん、異世界だなぁ（前の世界では見た事ない）

空はまだ暗め、昨日も書類の山を処理して遅寝して早く起きたので睡眠不足…正直寝たいです。

だけどＳｈｉｋｉさん、従業員の方も私と同じく早く起きている訳だから私だけ寝る事に出来ない。

あー！コーヒーが飲みたいよー

まぁ嘆いても何かが変わる事も無く思わずウトウトしてしまう。

だっていつも乗っている馬車とは違って町長用なのか揺れは少なめで座席も柔らかいのが…悪いと、思う…のよ。

「Ｈｉｋａｒｉさん？寝たければ寝ても大丈夫ですよ？まだ目的地までは距離も時間も掛かりますので」

Ｓｈｉｋｉさんに寝ても大丈夫と言われてしまった。断るべきだが眠気には勝てず甘える事にする

「…すいません。それじゃあ、少し。だけ……ｚｚｚ」

そう言い目を閉じ眠りについた。

§
§ §
§ §
§ §
§ §
§ §
§ §
§
§
§

「んっ」
外が眩しくなり目が覚める。寝たからどのくらい時間が経ったかは分からない。
「お、起きましたか。丁度良かったです、もうすぐ到着しますよ」
「分かりました。……あの、私、どのくらい寝ていました？」
「そうですね、とても気持ち良さそうに結構長い間寝ていましたね」
え、という事は少しだけと言っておきながら長い間寝てたって事？　あ、そういえば寝る時には忘れてたけど従業員が同乗しているんだよね……多分、いや絶対寝顔見られたよね。……もう、消えてしまいたい。
恐る恐る従業員の顔を見る。

……あの、なんか門の時より笑顔で私を見ているのですが……（見ていると言うより見守っているの方が正しい）

ま、まぁ問題は無いよね！……大丈夫だよね？

ふと目線を前に向けると目の前には門が見える。

多分これがケイの町の城壁なのだろう。

「さぁ、町の中に入りますよ」

Ｓｈｉｋｉさんがそう言い馬車のスピードを少し早めた。

２３話「筋肉モリモリの方」

「おぉ、スゴい」

大きな門を抜けて最初に見えたのは沢山の人、人、人

そして結構な人が筋肉モリモリの方

丸太、木製家具などを積んでいる馬車が結構な数ある。

Ｓｈｉｋｉさんによると、ここ、ケイの町は町の隣に広大な森林があり町の人々はこの森林の木を使った家具などを販売して生活しているらしい。

筋肉モリモリの方が多い理由は「木材（丸太）を切断、運搬するから」簡単に言うと「力仕事だから」だそう。

後、鉄道で載せたいと思っているは丸太ではなく家具などの加工品とも言われた。

馬車で丸太運んでいるの見た時丸太運搬用の貨車を用意しなきゃな～と思っていたけどいらなかったらしい。

ちょいと残念。

因みにケイの町には明日の朝まで滞在する予定でいる。

「それではこれから駅建設予定地に行きますね」

「あ、はい！よろしくお願いします」

そう言うと馬車が再び動き出し大通りを走ってゆく

道はレイの町と変わらず石造りで大通りに並ぶ家は殆どがお店で売っているのは殆どが木製製品と斧後たまに加工場もある。この道は商人が良く通るのでお店を多く配置しているらしい。

流石、良く考えている。

数分で到着。

場所はもう一つの大通りの端で土地は門の外、理由はこの鉄道は基本的には「町に属さない」からだ。

私が鉄道を作るにあたって一番恐れているのは「兵器利用」だ

鉄道は当然、武器、兵士も輸送可能だ。

そして鉄道は兵器利用すれば戦争は圧倒的に使った方が有利になる。

だがこの鉄道によって多くの血が流れる事になる。

幸せの為と生み出した物が不幸の促進剤となるのは絶対に嫌だ。

なので考えた規則には「町町間、町村間、村村間で戦争が起こった場合、その争いをしている町、村には「鉄道を引かない」「運行しない」事」になっている。（この他にも規則はあるが省略）

これら規則に同意しない限り、鉄道は引かない事にしているし、Ｒｅｎａさん、Ｓｈｉｋｉさんにも同意してもらっている。（一応レイの町、ケイの町間は平和条約みたいなのを結んでいるしそもそも町長同士とても仲良くしているので争いを起こす気は無いらしい）

「それじゃあ始めましょうか」

「はい」

馬車を降り、積んだ荷物も下ろす。

持って来たのは計測器だ。

鉄道を引く時に注意する事は「駅の場所が「水平」であるか」だ。

もしも駅が斜めっていたらブレーキが緩んだ時に重力で勝手に動いてしまうのを阻止する為だ。

勝手に動いてしまうと人身事故に繋がる可能性もあるので正確に測定しなければ行けない。

同行してくれた従業員達と協力しながら測定をして行く。

「ここは大丈夫です！」

「こっちも大丈夫です」

「ここは少し傾いています！」

「〇〇さん！どのくらい傾いてる？」
「１２度くらいです！」
「分かりました！ありがとう！」
分かったら直ぐにメモを取ってゆく
測定しても記録に残さなければ来た意味が無いし建設の時には大事な資料なので正確に、綺麗に書いてゆく。
夕暮れ時には測定が終了し、その後、ケイの町の宿で一泊した。

２４話「お気をつけて」

「ありがとうございました」
宿泊した翌日、朝。これから線路敷設地の測定、地理把握の為に測りながらレイの町に帰る事になっている。
なので現在、Ｓｈｉｋｉさんにお礼を言いに来たのだ（宿泊費の負担、馬車に同乗させてくれたので）
睡眠はバッチリ。眠気は一切来ない状態だ。
「もう少し滞在しても大丈夫ですよ？」
「いえ、書類仕事が残っていますので、すいません」
「そうですか…それではお気をつけて」
「はい！本当にありがとうございました！必ず鉄道事業を成功させます！」
「分かりました、期待しています」
礼を言った後、馬車に乗り込みケイの町を後にする。
少し、名残惜しい…
測定は少しずつ、ゆっくりやって行く、今回は地理把握が最優先事項なので体力を消

費させないように馬車を使って行く事になった。
「ここは谷になっているらしいんですけどどうします？」
「んー、ここは川も無いし盛り土で整地する感じで行こうか」
「分かりましたー」
こんな感じに進めて行く。
普通に馬車や徒歩で行く時には問題ない程度の坂道でも鉄道にとっては天敵になる可能性があるのでただ線路を引けば良いと言う訳では無いのだ。
測定を続けて約４時間、大体半分くらいまで進んだ頃
「この付近って毎年動物の大移動がある場所なのですけど…」
「大体どこ辺り通るか分かる？」
「あそこの森からあっちの森の方に行くんですけど」
動物の移動か…線路に動物が侵入すると引いてしまう事もあるし……仕方ない。
「…それじゃあここら辺は高架にすべきかな」
高架は線路に意図的に勾配を作る事になるから作りたくは無いんだけど…
「でも坂道はどうするんですか？」
「ゆっくりと上がれば大丈夫のはずだよ」
「分かりました」

測定をしながら外を眺めているとある景色が目に留まる

「…ねぇ○□さん、ここ辺りって花が沢山咲いているけど誰かが整備とかしているの？」

「いえ、町の外の土地には基本的には所有者はいませんから自然に出来た物かと」

目に留まったのは綺麗に広がる花畑、確か今の景色は春なのでとても綺麗に咲いている。

「…この景色が綺麗に見える位置に鉄道を引きたいな」

思わず口に出してしまった。あれ？なんか従業員の方達がスゴいやる気に満ち溢れている。何が起きてるのかよく分からないんだけど…

まぁ従業員のモチベーションアップは嬉しい事だし気にしないでおこう！（放置）

しばらく計測をしていると道端に赤い杭が見えた。

「○○さん、○□さん。お疲れ様でした！測定終了です！」

この赤い杭はどこまで測定したかを示す杭でここから先は既に計測が終わっているのだ（ケイの町の駅建設予定地の計測も同じく測定済み）

そしてこれで十分な資料は集まり今からでも建設が可能になった。
以外に直ぐだな（開始から一週間しか経ってない）
まぁ早いのはいい事だ！……事故しなければの話だけど。

その後、赤い杭を回収して資料の整理をしながら仮本社に戻った。
そして本社に資料と書類の山を持ってきてＫａｉに軽く恨まれる事になったりするのは少し先のお話。

２５話「気ニシナーイ気ニシナーイ」

「……！、…っ終わったーーー！！！！」
「私も終わったー!!」
「お疲れーＫａｉ、Ｙｕｉ。とりあえずお茶にしようか」
「Ｈｉｋａｒｉ！とびきり美味しいやつで！」
「私もー、疲れたねＫａｉ」
「確かに疲れた…もう数週間は書類との睨めっこは御免だわ」
「少々ブラックでは無いですかーＨｉｋａｒｉちゃん？」
「ごめんって、後日美味しいスイーツ屋に連れて行くからそれで許してちょうだい」
「俺は数週間書類と睨めっこしない環境を要求する～」
「アハハー……努力はします」
「なんかすっげぇ怪しいんだけど…」
「気ニシナーイ気ニシナーイ、はい出来たよ」
　出来たお茶をＫａｉとＹｕと私ｉの前に置き席に着く

え？「社長がお茶出しをしても大丈夫なのか？」だって？
…確かに２人に言われたよ、でも別に良くない？
それに従業員をこき使うのってブラックな感じで嫌じゃない？差別って良くないと思うのだよ、差別は。（偉い人風）

まぁ本音言うと私が淹れたいだけなんだけどね（淹れるの好きだし）

その後雑談してある程度時間が経った。

「それじゃあＹｕｉ、Ｋａｉ、私はこれから現場に行ってくるからゆっくりしてて」
「Ｈｉｋａｒｉ、また行くのか？現場の人に任せれば良くない？」
「そうなんだけど少しずつ出来て行くのを見るのって楽しいし向こうが頑張っているのにこっちはゆっくりくつろいでいるってのも嫌だし」
「へー、それじゃあ気をつけてね」
「うん！分かった」
そう言い道具と差し入れを持って現場へ向かう。

役所と現場は結構近いので直ぐに到着。
「皆さんお疲れ様です。差し入れを持ってきました！」
「あぁ、毎度どうもすいません。頂きます」
季節は夏に近ずいて来たので持ってきたのは冷たい飲み物。
それ以外にも暑さ対策としてこちらでテントも設置している。
「プハッー、ウメー（≧∇≦）」
「冷たい飲み物サイコー！（＊≧∇≦＊）」
作業員の方々にはとても好評だった。

「おーい、作業再開するぞー」
「分かりましたー監督」
数十分後、作業が再開される。
私も作業着に着替えて作業に参加する。
参加するのは線路周り。レールはまだ引かれていないが現段階だと枕木とバラスト、ある程度の配線がされている。
作業内容は配線の確認と枕木の位置、間隔、バラストの具合などだ。
勿論その確認の為の道具も持って来ている。

確認作業は地味な仕事だが一番重要な仕事なので手を抜けない。資料と自分の知識を駆使して一つ一つ丁寧にやって行く

～～～

「さて、やるぞー！、おおー！」

その後数時間作業して帰宅した。

２６話「大変な一日の始まりだ！」

あれから数ヶ月が経過。

毎日半パターン化した起床→書類処理→確認作業→処理作業→睡眠を繰り返し遂に開通日になった。

制服を着て最初に仮本社に向かう。

前回？からやった事は車両制作（委託）、新たな従業員の雇用、指導。町の人達に宣伝、広告。この４つだ。

車両は旅客用にＤ型蒸気蒸気機関車を４機、入れ替え用にＣ型蒸気機関車を２機、客車を９両、貨車を１０両用意した。

従業員は５５人から８７人と新たに３２人を雇用し、指導内容は礼儀、設備の操作方法の伝授。緊急時に備えての対策を行い、今回雇用した３２人は駅係員、車掌、保線員に宛てた。前回に雇用した４０～人は指導に時間がかかる運転士、機関助手、保線員、整備員、事務作業員として指導は事前に終わらせて来てある。

仮本社に到着。中にはまだ誰もいない。

みんなは後数十分後に来る予定になっている。
みんなが来るまでの間、この後の確認をして時間を潰す。

「おはようございます」
「○○さんおはようございます」
数十分後、確認が終わった頃、従業員の方達が続々とやって来る。
「おはようＨｉｋａｒｉちゃん」
「おはよー、Ｈｉｋａｒｉー」
「おはよう、Ｙｕｉ、Ｋａｉ」
丁度Ｋａｉ達もやって来た。
数分で全員が入社し、朝会を始める。
「おはようございます。今日は鉄道の開通式があります。ですのでこれからその開通式に参加し、その後はいつもの業務に戻る事になっていますので、よろしくお願いします」
「「「はい」」」
朝会が終了後、開通式が行われる駅へ向かう。

数分で駅に到着。駅はまだ空いていないが報道陣などの沢山の人が駅前に待機して

いた。
列車は全車自由席なのでその為だろう。
私達は駅の業務用扉から駅に入り準備を始める。
まずは券売機の裏側へ向かい切符の在庫確認。
お釣り用の銅貨、銀貨も用意してある。
因みに切符の値段は銀貨４枚（日本円で８００円）、入場券は銀貨１枚（日本円で２００円）となっている。
子供料金は設定していない。
改札は有人改札で切符販売は自動券売機を採用している。

次はホームに向かい混雑が予想される為ホームの端側にはロープを張り落下防止を図る。
ホームの設備は時刻案内は昔にあった真ん中に時計、両隣にそれぞれ平日、休日の時刻表を掲載している。
放送は手動でマイク、スピーカーは電話を応用した物だ。
ケイの町の駅の方にも同様の設備がある。
駅名はまだ伏せており開通式の時に公開する予定だ。

準備が全て終わったら配置に着き駅のシャッターを開けて乗客を構内へ案内を始める。

さて、大変な一日の始まりだ!

２７話「それぞれのレーンにお並びください！」

シャッターが開くと続々と乗客がやって来る。
直ぐにホームに向かうとする乗客達を呼び止め案内を開始する
「まずは切符売り場で乗車券、入場券をご購入下さい！」
「乗車券、入場券が無い方は改札を通過できません！」
「切符売り場はこちらでーす！それぞれのレーンにお並びください！」
言われた通りに乗客達は乗車券、入場券を購入して改札を通過する。
改札鋏の「カチッ　カチッ　カチッ　カチッ」と心地の良い金属音が鳴り響く
私も改札を通過して、ホームへ向かう。
ホームに到着した時「ボーーーー!!!!」と汽笛を鳴らし蒸気機関車、Ｄ５１が入線する。
今回製造したのは日本を代表する蒸気機関車、「Ｄ５１型蒸気機関車」通称「デゴイチ」だ。
因みにＣ型蒸気機関車には「Ｃ１１」を採用した。
Ｄ５１の入線で驚く乗客と必死にカメラを構えて写真を撮る乗客達。
この反応は前の世界と同じだ（因みに私はいきなりの汽笛にビビる人です）

Ｄ５１がホームに停車後、扉が開き乗客がぞろぞろと乗車し始める。
仮に着けてみた時違和感がバリバリにあったからだ
客車は２１ｍの２ドアでボックス席４両編成、連結器はナックル型連結器、密着連結器でも良かったのだが、見た目が違和感バリバリだったので、却下とした。

発車の５分程前にＲｅｎａさん、Ｓｈｉｋｉさん、○△さんが駅に到着する。
「「おはようございます（おはよう）。Ｈｉｋａｒｉさん」」
「おはようございます。Ｓｈｉｋｉさん、Ｒｅｎａさん。○△さん（現場監督）今日はよろしくお願いします」
「「こちらこそ、よろしくお願いします」」
発車の３分前となり開通式が始まる。
「それではこれから鉄道開通式を行います。」
「おはようございます。私はこの鉄道の事業主、そしてこのレイ駅の駅長のＨｉｋａｒｉと言います。
今日は雲一つ無い晴天でまるでこの鉄道開業を祝ってくれているようです。
私は今日に至るまで様々な取り組みを行い今日、鉄道開通にまで漕ぎ着けました。これも支援して下さった方々のお陰です。この場をお借りして改めてお礼申し上げます。

それではこの鉄道の名前を発表致します。この鉄道の名前は「菜森鉄道（なもりてつどう）」です。

菜森鉄道の「菜」は菜の花から取った名前でして黄色は幸福を意味し無事故を祈り「森」は木の根の様に路線を大きくして、１００年と２００年と続いていって欲しいと思いこの名前を付けました。」

そう言い持っていたプレートの布を取る。布を取って現れたプレートには「祝　菜森鉄道開通　レイの町ーケイの町」と書かれている。

「最後になりますがこれからはこの鉄道も人々の足となり町の発展へ貢献出来ればと祈っております。以上です」

そう言いマイクを司会者に返す。

「ありがとうございました。それではプレート設置を致します。」

司会者がそう言った後、ＳｈｉｋｉさんとＲｅｎａさんにプレートを渡し２人は線路上に降りプレートをＤ５１に取り付ける。

取り付け終わると同時にシャッター音が鳴り響く

「次はテープカットを致します」

ホームに戻り赤い絨毯が引かれた所に行き私と○△（現場監督）さん、Ｒｅｎａさん、Ｓｈｉｋｉさんの４人とテープカットを行う。

「それではお願いします」

「「「…せーの!」」」

そう言いテープを４人同時に切る

テープを切った瞬間Ｄ５１が「ボーーーー!!!!!」と汽笛を鳴らし列車が動き出した。

乗っている乗客達は窓を開けホームの人達に手を振っている。

列車を見送り後、「これにて開通式を終了いたします」と司会者が言い開通式が終了した。

２８話「もっと早くなりますよ」

開通式終了後、一旦ＲｅｎａさんとＳｈｉｋｉさんと一旦駅長室へ向かう。○△さん（現場監督）は用事がある様で直ぐに駅を去った。

「とうとう完成しましたね。菜森鉄道、良い名前ですね」

「ありがとうございますＳｈｉｋｉさん。とても嬉しいです！それとＲｅｎａさん、工事、建設業者の手配、資金の援助、本当にありがとうございました。援助して下さったお金は少しずつお返ししますので少々お待ち下さい」

「いやいや良いのよ！お金は！　　結果こっちは鉄道を引いてくれたお陰で物資、資金のやりとりが円滑になってこれまで以上に繁盛するようになったし！…だからお金は返さなくても大丈夫。もう既に支援金以上の効果が来てるんだから」

「分かりました。……あ、そろそろ到着時間ですね。ＲｅｎａさんＳｈｉｋｉさん、よろしければこれから鉄道に乗って見ませんか？」

「いいんですか？僕達乗車券も入場券も買っていませんが？」

「いえ大丈夫です。そもそもこの事業はＲｅｎａさん、Ｓｈｉｋｉさんが協力してくれなければ実現出来ませんでしたから」

「それではお言葉に甘えて、乗らせて頂きます」
「はい！それではどうぞこちらへ」
駅長室を出ると列車が停車しており乗る号車の１号車へ向かう。
実は事前に駅員の人達には伝えておりこの列車の１号車を「指定席」にしている。
現段階では指定席はまだ導入されていないのだが今日特別に設定した。
そして指定席切符は現段階では一般には販売されていないので実質貸し切り状態に出来る。
乗客は一部混乱しているが駅員がちゃんと説明、誘導している為特に問題は無かった。
車内に入ると中ドアがありそれは手動だ。
座席はオールボックス席、上には荷物置きと帽子掛けがある。
「座席はふかふかですね」
「おぉ、そうですね」
ＲｅｎａさんもＳｈｉｋｉさんも良い反応をする。
自分が作った物で他の方が笑顔になってくれるのはとても嬉しい。
数分後、ベルが鳴り、ドアが閉まり列車は汽笛を鳴らし動き出す
「動き出しました！おぉ既に馬車より早いですね」

「これからもっと早くなりますよ」
「えぇ!?これ以上早くなるんですか!?スゴいですね「蒸気機関車」と言うのは……」
「Ｈｉｋａｒｉさん、この蒸気機関車?はレイの町とケイの町を何時間で結ぶんですか?」
「えっと交換時間も含めると……大体2時間ちょっとで結びますね」
「え、えっと…今の馬車は7時間くらいだから……え!という事は5時間も早くなるんですか!?」
「そうですね、そして今は単線ですけど複線にすれば本数も増やせますし交換時間が無くなるのでもっと早くなりますね」
「そ、それはスゴい…これは馬車と比べ物にならないくらいの利便性ね」
「いや、そうでもないですよ、鉄道は莫大な資金と知識が要求されますから…」

～汽車の旅は続く～

２９話「面白い発想ですね」

汽車がレイの町を出て数分後、未だに興奮が冷めないＲｅｎａさん、Ｓｈｉｋｉさんは車窓を眺め風景の過ぎる速さを実感していた。
「この速さは昔雪山を滑った時のスピードよりずっと早い！」
「安全性は大丈夫なの？」
「大丈夫ですよ。ある程度の雨風が来た場合は列車のスピードを落として運転したり、運休したりする予定するし、地盤についても突き固めて強度を高めているので大丈夫です。それに一定の間隔で保線員の方が点検をしていますので」
「へぇ～色々な安全対策を施しているんですね」
「おや、ここ辺りから線路が上がっていますけどどうしてこうなっているんですか？」
「あぁ、ここは動物の大移動があるらしいので高架にして動物が線路に侵入しない様にしています」
「そうか、馬車の時は関係ないが列車は高速で走っているからこういう対策が必要なのか…」
「こちら側は何やら用地が用意されているのですかこれは何ですか？」

「それは将来複線化、電化する時に改修工事の工期を縮める為の工夫です」
「電化？何ですかそれは？」
「それは今は石炭を燃料にしていますが、将来的には電気を使って走る方法が主流になります。そしてその電気で走る列車に対応した線路にする事が電化です」
「へ～電気で走るようになるんですか。そしたら今の町と同じ物で行けますかね？」
「いや、電圧は上げないと無理だと思います」
「そうですか…やはり特殊な設備が必要なのですね」
「そうですね」
『間も無くアイラ駅に到着致します。この駅で対抗列車の待ち合わせを行う為数分停車いたします』
「この駅は近隣の村を誘致して作った駅で対抗列車の待ち合わせを行うので数分停車します」
「へ～村を誘致ですか…面白い発想ですね」
「はい、どうせ止めるのなら有効活用しようと言う事で作りました。」
「あ、そういえば安全対策で列車同士の正面衝突とかは大丈夫ですか？」
「それはここ、アイラ駅に「安全側線」を設けているので正面衝突「は」防げます。」
「？、「は」とはどういう意味ですか？」

「それは安全側線を実際に見てもらった方が分かりやすいと思います、一旦車外に出ましょう。対抗列車が来るまでは時間がありますから」
「「分かりました」」
　列車を降りホームの端を見るとそれは一目で分かった
「こ、これは?」
「……これが「安全側線」です」
「何ですかこれは!ポイントの先に「線路が無い」じゃないですか!」
　そうＲｅｎａさん、Ｓｈｉｋｉさんが見たのは「片方の線路が先に繋がって無いポイント」。勿論線路が無い方に列車が来れば１００％脱線する。
「……この「安全側線」は暴走した列車を「わざと」脱線させて止める方式です」
「そんなの怪我人が間違いなく出て来るではありませんか!」
「でも正面衝突だと「死人が」何十人と出て来ます。」
「「っ!?」」
「…だけどこれは最終手段です。この装置を使わないように様々な安全対策を行なっているんです」
「そうだったんですか…」
「そろそろ対抗列車がやって来ます。車内へ戻りましょう」

「「分かりました」」

車内に戻った頃、対抗列車がＡｉｒａ駅に到着。

「何やら運転手が何かを持ってこちらの運転手に渡しに行っていますけどあれは？」

「あれは「スタフ」です。スタフ閉塞と言う閉塞方法を行う為の道具です」

「？、スタフ閉塞とは何ですか？」

「スタフ閉塞とは通行票を持った列車のみ線路に入れる様なると言う物理的な閉塞です」

「それじゃあスタフが無いと？」

「一生この駅にいるか、もしくはレイ駅に戻るかの２択になります」

「あらら…それじゃあ対向列車は責任重大ですね！」

「そうなりますね…」

～汽車の旅はまだ続く～

３０話「本当、信じられません」

スタフがこちらの運転士に手渡されこの列車はアイラ駅～ケイ駅間の通行許可証を入手し汽笛を鳴らし動き出す
「動き出しましたね」
「それじゃあケイ駅までは！」
「もうすぐですね」
「とても早いですね…馬車だったら未だにレイの町が見ずらくなった所付近なのに」
「そういえばこの区間以外に延伸するとしたらどこの町に伸ばすのですか？」
「出来るならですけど「アルルの町」に伸ばしたいな～と」
「「アルルの町」ですか…何故なんですか？」
「今、車両工場の部品って殆ど私の万能加工とアルルの町からの「特注品」なんです。そしてアルルの町からレイの町までは時間が掛かるのでそれを無くせないかなぁと思っていて」
「良いですね！その時は僕もお手伝いしますよ！！」
「すいません、ありがとうございます」

～～～

列車は終点、ケイ駅に到着
ドアが開き、続々と乗客が降りて行く
『終点、ケイ駅に到着です。お忘れ物なさいませんよう、ご注意下さい。２番線に参りました列車は車庫に向かう回送列車です。ご乗車にはなれませんのでご注意下さい。乗務員は車内点検を実施して下さい。』
「遂に到着しましたね。時刻は発車から本当に約２時間。いや～昨日夜に出発して７時間掛けてレイの町に着いて帰りは２時間…本当、馬車で来たのが馬鹿馬鹿しくなるくらい早いですね」
「本当、革命的ですよね…これ、周りの…いや、ほぼ全ての町、村が喉から手が出る程欲しい設備ですよね。
…それを奇跡的に入手出来た私達の町は、幸福だったとしか言えないですよね。」
「そうですね。本当、信じられません」
「いえ、そうでもないですよ。いずれ来る事だったでしょうから、私はそれを少し早めただけですし…」
そう、この変化はこの先誰かが産む筈の物なのだ。その役割を奪ってしまったならその分頑張ろうと私は胸に誓った。

31話「会議を始めます」

鉄道開業から早3ヶ月、鉄道事業は大成功を収めている。
正直、北の大地の新幹線の様に開業当時は黒字でその後赤字となるかもと不安だったのだがその心配は要らなかったらしい。良かった…　本当に……
因みに一番利益が出ているのはやはり貨物だ。
貨物輸送は大体の場合行き満杯で帰り空気輸送なのが殆どなのだが意外にもどちらの方面にも貨物の需要があったらしい。これは私も予想外。
ケイの町→レイの町へは木製家具など、レイの町→ケイの町へは西の町の方から運ばれてくる商品を輸送している。
貨物輸送にはルールがあるのだがそれでも馬車よりは早く、便利な為鉄道を使っているらしい。（私自らの調べ）
貨物列車に乗せる荷物のルール
・パレットの上に収める事（パレットからはみ出さない）
・生物は持ち込み禁止（魚、肉）
・生き物の持ち込み禁止

・割れやすい物、色が移りやすい物は包装して破れにくい、移りにくい様にする事
この４つを守って貰っている。
でも将来的には冷凍車を導入して生物の輸送も可能にする予定だ。
ほんと、先人の知恵ってすごい・・・
「Ｈｉｋａｒｉさん、そろそろ開業の時間です」
「ん、ありがとうＹｕｉさん、今行く」
Ｙｕｉに礼を言い会議室へ向かう。
職場ではメリハリをちゃんとしようと言う事で友人であっても「さん」を付けるようにしてもらっている。
階段を上がり、直ぐに会議室に到着。
室内へ入り席に座る。
他の座席には各部署の長達が座っている。
この事業を開始してから効率化の為にグループを分けている。
部は７つあり
本部を総括として、主に・運輸部・貨物部・車両部、保線部・サービス部・保安部で構成されている。
この他にもあるが今回は省略する。

それぞれの主な役割は
運輸部が列車の運行の管理、運転士、車掌の運用管理
貨物部が貨物の取り扱い
車両部が車両の点検、整備
保線部が線路、線路周りの点検、整備
サービス部が駅業務（駅員）清掃業務（清掃員）
保安部が駅、列車内、乗客乗務員の安全管理、駅業務の補助をしている。
「それでは会議を始めます。よろしくお願いします」
「「「「よろしくお願いします」」」」
「まず何か問題点などありましたか？」
「サービス部です。お客様から列車の発車時刻表が見づらいと来ています」
「それでは壁に掲示する時刻表の数を増やしましょう。」
「駅員を増やすのはどうでしょう？」
「駅員を増やすとなると人件費と育成期間が必要です。そもそも入りたいと言う人が集まるかどうかも分からないのに・・・」
「そうですね・・・」

「では壁に掲示する時刻表の数を増やす。を回答にしても大丈夫ですか？」
「「「異論ありません」」」
「それでは他に問題点などはありましたか？」
「保線部です。そろそろ時期的に森の動物達が大移動をする時期らしいのですがどうしますか？」
「・・・　一応、橋、監視塔の点検を、問題があれば即報告を、問題が無ければ保安部の方は監視塔を稼働させて事故の早期発見、報告をするようにして下さい」
「「分かりました」」

その後も会議を続け、時間となり解散となった。

ケイの町ーシャラの町間
３２話「もっと遠くに!!」

「・・・」（書類処理中）
「・・・」（同じく書類処理中）
「・・・・・・・ あー!!もうイヤ!!」（ガタッ）
「!?、ひ、Ｈｉｋａｒｉちゃん？いきなりどうしたの!?」
「毎日毎日書類仕事、もうイヤなの！私は延伸したい！もっと遠くに!!」
「それ昨日も言ってたよね・・・」
「あ、うん。言ったね。昨日も」
「それで延伸先とか考えてからにしようって決めたよね？」ゴゴゴゴ
「ハイ。・・・ な、なので考えて来ました！徹夜で！」
「はぁ…とりあえず見せて」
「はいどうぞ。深夜テンションで考えた物だからおかしな点もあるだろうけど」
「・・・」（深夜テンション？・・・）
「・・・ どうかな？これでいい??」

「うん、見た感じ問題はなさそうだね。利益もちゃんと出そうだし」
「じゃあ明日の会議で出していい？」
「これならいいよ。・・・　てか私一応Ｈｉｋａｒｉちゃんは「社長」なんだから別に勝手にやっても良いと思うんだけどね」
「でもやろうとしたらＹｕｉが止めるじゃん」
「だって最初蜘蛛の巣みたいに路線網を張り巡らそうとしてたでしょ。」
「うぐっ、け、けどこれは将来的に必要になるもので…」アセアセ
「でも今は必要無いよね」ゴゴゴゴ
「はい。そうです。必要ナイデス。過剰デス。ハイ」
「分かればよろしい」（フフン）
「（なんだか最近、Ｙｕｉが怖いです）」（ガクブル）
「（こう言う時空気でよかったって思うわ。俺）」（ガクブル）
「はいはい、さっさと手を動かして（書類作業）終わらす！」
「「は～い」」
～～～

「「「よろしくお願いします」」」

～～～

「本当は直通列車を走らせたいんだけど水の補給とかをしないといけないからアルルの町で乗り換えてもらう感じになるかな。

後、アルルの町には車両工場と操車場を作って効率化を図る予定です」

「分かりました。ありがとうございます」

「他に分からない点、異論は?」

「「「ありません」」」

「それではケイの町ーアルルの町間の敷設と車両工場の建設を優先的にお願いします。

それでは会議を終了します。ありがとうございました」

「「「ありがとうございました」」」

こうして延伸工事が始まった。

３３話「認めん、認めんぞーー!!!!」

ここは商業が盛んなレイの町、いつも賑わいを見せるこの町の一角、役場の一部屋が菜森鉄道の仮本社。

この本社ないもいつも通りＫａｉが書類仕事に悲鳴を上げている。（イヤー!!）

そんな時、、

「・・・」

『モウショルイシゴトハシタクナーイ!』

『ナニイッテルノチャントヤッテ!』

「・・・」

『ワーギャーワーギャー』

「・・・」

「認めん！認めんぞーーー!!!!」
「「!?」」
「ちょっと村長！何してるんですか！いきなり突撃だなんて!!」
「うるさい！こういうのは突撃が一番確実なんじゃ！黙って見とれ！」
「そう言ってこの前もｅｔｃ…」

「……　あの、どちら様でしょうか？」
「ワシか、ワシはアークの村の村長じゃ」
「僕はＡｐｉ（アピ）、村長の息子です。」
「（話は聞いてくれるのね）……　えっと、本日のご用件は？」
「それは僕がお話します」

～～～～～～～～～　説　明　中　～～～～～～～～～

「……えっと、簡単に言うと今工事している延伸工事について村民はアークの村を経由するのに賛成してるけど村長だけが反対してて今回乗り込んで来たって事ですか？」

「そう言う事です。すいません……」
「一応ですけど、承認書にサインは…」
「その時は妻がワシのいない間に勝手に…」
「でも村長、出かける時「全て任せる」って言ってたじゃないですか」
「でも村に行くのに便利になったらセラの町の兵士に捕らえられてしまうじゃろ！」
「いやいや、てか村の場所はとっくにバレていますし町長も変わっています、そして今じゃセラの町とは取引相手の一つですよ」
「え、ワシ初耳なんじゃけど」
「しかも町長さん、結構責任を感じているらしく。村の作物を高値で買い取ってくれるお得意様の一人です」
「じゃあ捕らえられる事は？」
「ありえませんね」
「そ、それじゃあ…　ワシが、ワシガ…　イママデ……　ケイカイシテキタイミハ……　アハハ…　アハハハハ……」
「あの、Ａｐｉさん。村長さんの様子がおかしいのですけど……」
「あぁ、気にしないでください。少し現実が受け入れられなくて放心状態になってるだけですから。いつも事ですので気にしないでください」（＾＾）

「アッハイ」（ドユコト？（理解していない））
「それでは延伸の方はお願いします。いきますよ村長」（それでは～）
「イミハナイ……　アハハハハ……　ハハハハ……」
　ガチャン

「……　さ、さて！書類仕事を再開させましょうか！」
「イヤー!!」
「しつこい！イヤでもやるの！そうしないと明日の自分が後悔するぞ～」
「うっ、分かりました。やります」
　そして書類仕事を再開した。

３４話「……出来そうだわ」

ガタンッ

「痛っい！」

どうもＨｉｋａｒｉです。今私はＫａｉと数名の従業員と共に延伸先であるアルルの町へ線路敷設予定ルートに添って向かっている途中なんですけど、アークの村以降、道が大して整備も何もされていないので馬車が揺れたり跳ねたりでお尻が痛いです……あれぇ？この馬車サスペンション（バネ）入れられてるよね？それでも跳ねるってどんだけの道なの（怖っ）……

もしかしてＹｕｉが来なかった理由ってこれを読んでたから？……まっさか～そんなの出来る訳ー、、、出来そうだわ（Ｙｕｉサンパネー）

「…ねぇＫａｉ、さっきから馬車が跳ねてて痛くない？私は痛いんだけど」

「そんなに跳ねてるか？こんな感じゃないのか？」

「え、Ｋａｉは痛くないの？」

「別に？結構揺れて面白いな～くらいだろ？…なぁみんな！」

「「おう（そうだな）」」
「あっ、そうなのね……」
　この揺れで大丈夫って……男性って強っい（元男性）（てかもう打ち解けてるの!?）
「お、見えて来ました！」
　従業員の一人が言う
「え、マジ！俺にも見せて！」
「ちょっとＫａｉ！少し落ち着いて、狭いんだから！」
「おいおい、そう言ってるＨｉｋａｒｉも身を乗り出して前を見ようとしてるじゃん」
「うっ、だって楽しみじゃん！鉱山だよ！鉱山！レアな鉱石が出て来るかもしれないんだよ！トレジャー心がこんなに擽られる物はないよ！」（トレジャー!?（☆∀☆）／）
「分かる!!めっちゃ分かる!!出来るなら見るだけじゃなくて実際に掘ってみたい！」

　ガシィ
「……Ｋａｉ、私は君が私の友達でいてくれてとても感謝している」
「……お、おう！俺もＨｉｋａｒｉと友達で良かったと思ってるぞ！」（何か偉人みたいになってる…）

「あの、社長って女性ですよね？何かすごく男っぽいんですけど」ヒソヒソ
「何言ってんだ、社長は我々にとって時に癒しであり男心を理解してくれる数少ない「女性」だ」ヒソヒソ
「すいません、男心を理解してくれる女性に会うのは初めてで」ヒソヒソ
「あぁ、正直俺も初めてだ。こう言う話を妹とかに話しても「何言ってるの？」って蔑まれて終わるからな…」ヒソヒソ
「やっぱりそうですよね…俺この会社に入って正解だったな、少々グレーな時があるけど」ヒソヒソ
「会社ってのはこんなもんだろ、他はめっちゃブラックな所もあるらしいしそこに比べたら全然いいだろ」ヒソヒソ
「そうっすね」ヒソヒソ
そうしているうちにアルルの町に到着した

３５話「物好きであるかもしれないですけど」

「わーお。砦高ーい」
「ここからじゃ鉱山は見えないな」
「まぁ町に入れば見れるでしょう…ぞれじゃあレッツゴー！」
そう言うと馬車は門へと進み出した。
～～～

「へ～、それじゃああんたは貴族様なんだ、珍しいねここには商人か物好きくらいしか来ないのに…あ、この紙に人数、代表の名前を書いてね」
「貴族じゃないですよ。物好きではあるかもしれないですけど……はい、これで大丈夫ですか?」
「…大丈夫よ。料金は銀貨1枚と銅貨2枚ね」
「えっと…銀貨1枚に銅貨2枚っと……これでお願いします」
「はい丁度、じゃあこれ口当てね。全員外にいる間は付けておいてね」
そう言って渡されたのはガーゼみたいな素材で出来たバンダナサイズの布
「あの、どうして着ける必要があるんですか?」
「あぁそれはね。この町にある鉱脈を掘る時に出て来る煙と粉が体調を崩す原因の一つみたいでね、それを防止する為さ」
「へ～そうなんですか……どうですか?ちゃんと着けられてますか?」
「大丈夫よ、それじゃあ門を開けるわ。気をつけてね」
ギィィと言う音を上げて片方の門が開く
「はーい、ありがとうございました～」
町の中はちゃんと活気があるがやはり他の町と違いみんな口当てをしている。
全体的に鍛冶屋、金属製の雑貨を売っている所が多い（あ、フライパンとお鍋が安い

…後で買いに行こ）
「なぁＨｉｋａｒｉ、この口当てってやつ着けてると少し喋り辛いな」
「ハッ…そ、そうだね！……でも着けないと体調を崩しちゃうかもしれないから仕方ないよ」（ヤバっ、ボーとしてた）
「だよなぁ……で、鉱山ってどこだ？町に入ったけど山一つ見つからないぞ」
「あ、本当だ。見つかんないね……町長さんに会った時に聞いてみるよ」
「そんじゃ頼む」
「はいはーい……覚えていたらねっ」
「・・・」（じーー）
「……お願いだから無言の威圧やめて」
「お前が！了承するまで！威圧を！辞めない！」
「すいませんでしたちゃんとやります」
「ならよろしい」

そうしている内に馬車が止まった。
どうやら目的地である役所前に着いたらしい。

３６話「休憩！解散！」

「……ぞれじゃあ予定通りに進める方針で。ありがとうございました」
「「「「ありがとうございました」」」」
アルルの町に入ってから約２時間後、会議が終了した。会議の内容？……つまらないからカットだよ。
まぁ簡単に言うと「駅の設置場所？とりあえず便利な所に設置してくれれば良いよ～だけど門の外の事はそっちで責任取ってね～」って感じだ。実際にはスゴい周りくどく言われたけど…（簡単に言えや！難しい話は嫌いなんだＹＯ！（疲れすぎで精神異常（腰痛い…（椅子硬っい！））））
後、対面した時手配済みだと言うの宿の場所と門で支払った銀貨１枚と銅貨２枚と通行証が渡されました……この時は好感度高かったんだけどな～（人の評価って意外と簡単にさがるんだね）
とりあえずもう疲れたのでＫａｉ達を連れて役所の外に留めてある馬車に乗り込み手配してくれたと言う宿へ。顔と雰囲気をみる限りＫａｉ達も疲れた様で町に入ったばかりの時の笑顔は何処へやら状態である

～～～

～～～

なる程、だから山が見当たらなかったのね

ん、と言う事はこの下掘れば鉱石が出て来ると言う事かって思ってそれも聞いてみたんだけどここら辺は居住スペースとして鉱石採取目的での採掘を禁止してるらしい。ちゃんと考えてるんだなぁ…（寝起きでＩＱ低下中）

そうしている内にＫａｉ達が集まって来た。

３７話「うぅ…測りづらい」

「…早いな、Ｈｉｋａｒｉ」
「あ、Ｋａｉ。疲れは取れた？」
「バッチリ！」
「後あれだって、受付さんに聞いたんだけど。山からじゃなくて地下から鉱石が取れてるんだって」
「へ～……って事はこの下掘れば鉱石が出て来るのか!?」
「かもしれないけどここら辺は居住スペースって事で掘っちゃ駄目なんだって」
「ちぇ、駄目なのか。もしかしたら居住スペースにレア鉱石とかが眠っているかもしれないってのに」
「でも掘って行ったらここ辺り全部堀下がって雨とか降った時大変だよ…」
「だよなぁ…どうにかして掘れないか……」（橋とか～…駄目か）
「あらら……てかもう時間になっちゃったよ……ほら、戻っておいでー行くぞー」（グワングワン）
「…はっ！ってちょっやめろ！揺らすな酔う！…力つよ!?」

「お、戻って来た。行くよ～」
「うっぷ…了解」（キモチワルイ…）
　その後馬車に乗り込み、駅の建設予定地へ向かった
～～～

「(やっぱりアナログだからかとかあるよね……)」
「おい、Ｈｉｋａｒｉ大丈夫か?ボーっとしてたけど」
「あ、うん!大丈夫」(今は調査に集中しなきゃ)
その後も少々手こずりながらも作業を続けた
～～～

く通年使える貴族や重要人物にしか発行されない物らしく、門番の人に「アンタ達やっぱり貴族だったじゃない」と揶揄われたのは内緒。
「おぉ！本当だ！大きな穴が出来てる！」
「本当だねＫａｉ！露天掘りだ！」
　鉱山と言ったら山の中にトンネルを掘って行くのがよく想像されるがやはり電気がまだ未発達の為か暗くならない様露天掘りになっている。中央は地下水で出来たと思う大きな池が出来ていて、どうやら排水がされていないらしい
「へぇ～掘れた鉱石は馬車に積んで渦巻きの道を上がって工房とかに運んでるんだな、目が回りそう」
「そして、道中でも掘ってる人がいるから時が経つにつれどんどん穴が大きくなっているんだね」（面白～い）
「……掘りたい」
「分かるけど服汚れるし怪我するかもしれないよ？そもそも道具が無いし…」
「大丈夫！服は次の日には着替えるし道具は町の工房で売ってたから！」
「だけど次の日も計測でしんどいよ？大量必要だし」
「うっ……分かった採掘はもっと後にする」
「なら良かったよ」

「早く行こう…俺の気が変わる前に」
「あ、うん。分かった（何かどこかで聞いた記憶が…）」
その後馬車に戻り町の方へ戻った。

３８話「買います！」

石で整備された道をカタカタと音を立てて進み数分で宿に到着した。

「良し、これで今日の仕事は終了！後は宿で寝るも町を散策するも買い物するも大丈夫だけど、宿が閉まる８時前には宿に帰る事、以上！」

「「「はい」」」

馬車を再び宿に預けＫａｉ達と解散し売り場の立ち並ぶメインストリートへ向かう。

「お金良し、バッグ良し、服装良し、これで大丈夫」

一応確認だけしたが大丈夫だったぽい（また駄目になってるとかだったら終わってるし…）

「買う物は、とりあえず安かったフライパンと鍋と明日用の服だね」

それでは早速、目的の３点を買っちゃいましょう！

～～～

「うん、ちゃんとしたフライパンだ」
　レイの町の値段が普通と思っている私にはどうしてもこのフライパンがフライパンの形をした何かに思えてしまう。てかフライパンに限った話ではなく金属製の物全般が安い
「……食器も買っちゃおうかな？安いし」
「お客さんどうかしたかい？」
「あ、え、えっとここのフライパンとかって安いですよね！」
　あ、急に声をかけられたからきょどっちゃった。……恥ずかしい
「ん、そう言うって事はお客さん遠くから来た感じかな？」
「あっはい！レイの町から来たんですけど」
「あぁ～レイの町ね！あれでしょ、何か最近鉄道？ってのが出来たんでしたっけ」
　おぉ！もうここまで情報が！…ってアルルの町の人もレイの町に商品を運ぶ為に使ってる筈だから情報が来てるのは当然か……
「そうですよ」
「へェ～それじゃあ納得だ。この町で売ってる金属で出来たのはこの町で作ったやつだからな。運ぶ手間も余計な金もかかってないから安いんだよ」
「そうなんですか、それなら納得です」

「話がそれちまったな、探してるのはフライパンと食器か?」
「はい、後鍋も欲しいんですけど」
「そうか、フライパンと鍋ならこれがオススメだな、家の工房で作ってる物なんだが軽くて丈夫な金属を使っててな、お客さんでも軽々と使える筈だ」
「あ、本当だ。今使ってるのより軽い…」
「だろ? 多分だけどお客さんどこかに宿借りてるだろ?今ならここで購入した商品を宿まで運ぶサービスも付けるぜ」
「買います!」
「毎度!そして食器はこっちだ、付いて着てくれ!」
「分かりました」

～～～

「いやいや違いますよ！」（あれ～この会話門でもやった気がする）
「…まぁお客さんがそう言うならそうなんだろ。了解、それじゃあ商品はちゃんと届けておくからな」
「はい、お願いします！」
「ありがとうございました～」
店を出た次に向かうは服屋だ

３９話「初めてなんですけど……」

「へぇ～」

お店の中は元の世界とあまり差はなくハンガー?にかけられた服を選んでレジに持っていってお会計と変わった所はない。

そして鉱山がある町だからか作業着も売っている。お義母さんからの情報だと服屋って言ってるけど身につける大体の物を揃ってるらしい。まぁそもそも分ける程アクセサリーとかが充実はしてないからこうなっているのだろう。…私からしたらありがたい限りだけど

「シャツとズボンは～っと」

うん、変わった点は無し!強いて言うならまだジーパンが無い事かな?（ジーパンは革命児だったんや……）

女性になってからあんまり変化はなかったけど服とか物を選ぶのに結構時間を取る様になったのよね…いや～選ぶのが楽しくて、仕方ないよね!

「……あ、これいいかも」

結構いいデザインの服を見つけた、へぇ～探すとあるんだね（これにしよ）前の世界

では適当に選んでたからね）

一通り選び終わった後、そういえばそろそろ新しい髪留めが欲しかった事を思い出しアクセサリーコーナーへ……ってあれ？…髪ゴム置いてなくない？

一通り見て回ったけど髪ゴムがどこにも置いて無い。

ん？どゆこと？……あ、もしかしなくてもここってメンズショップ？

周りを見ても男性の方しかいないから自分が浮いてる様に感じる……

ちょっと思い鏡で選んだ服を合わせて見る……あ、大丈夫だったわ。

意外と行けました（男装してるみたい（でも前世の身体の感覚で選んでいるから何か違う感がする…）

でも今の私にはおかしいと思い却下にして服を戻した後店を出てレディースショップに入る。

良い服だったんだけどなぁ……（残念）

さて、気を取り直して～……ってやりたいんですけど、助けて下さい。今私、どうすればいいのか全く分かりません。

そんなの普通に服選んで終わりじゃん？って思う方もいらっしゃると思うんですけど聞いて、お願い（ガチトーン）

私前世男やんけ、だからこんな所無縁じゃん??そして転生?転移?した今はお義母さんに買って来てもらってたの…こんな年齢なのに一人で買い物も出来ないのー引くわーって思うかもしれないけど!私も思っちゃってるけど!……何か私ここに居てはいけない感じしない??意識過剰だと思うけどどうしても思っちゃうのよ、仕方ない事なの!男としても生活に慣れていたから!仕方ないの!しかも……ｅｔｓ……

「……お客様?」
「ひゃい!」
何か今変な声出た!?!?
「どうかしましたか?」
「あっ、はい……／／／」
恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい変な声出ちゃったよどうしよどうしよどうしよう……だけどちゃんと話さないと。うぅ
「あの…」
「はい」
「実は私、服選び、初めてなんですけど…」
「?……!（ピコン）……はい!分かりました!」（とびきりのスマイル）

わー眩しい。営業スマイルの筈なのにすっごい眩しいよ、これ。後何か目が『キュピーン』って効果音が付きそうな目をしてるよ。私これアニメで見た事ある、ヒロインとかを着せ替え人形にする時の目だ。私の勘が言ってるよ『やられる前に逃げろ』って…

「あの、やっぱr」

「それではこちらへどうぞ！」

駄目だ！逃げられない！

終わった…私の時間。さらば、私のお財布

「お客様は身長が平均なので全て行けますね！とりあえず全部試してみましょう！大丈夫です！服は私が選びますので！大丈夫です！必ずお客様に合う最高の服を選びますから！それとd（略）」（早口）ハァハァ

その後、何やかんやあって、お会計をした。

「あ、ありがとうございました……」

「「ありがとうございました～」」（肌ツルツル（やりきったぜ顔））

…服は一応買えました。私が動きやすいのをお願いした服と店員さん完全お任せの

服の合計５着。

本当は３着で終わりそうだったのだけど途中で別の店員さんが参加して更に２着増えました（どうやらレジ係だったみたいです）

買わない選択肢もあったんだけど、なんやかんや私も店員さん達が選んでくれた服が素敵だと思ってたのでそのまま流れに乗った結果ですね。おかげで時刻はすっかり夕方ですけど……もっとお店回りたかったな（遠い目）

でもまぁ鉄道が通れば気軽に行ける様になる筈だからいいでしょう（ポジティブ）

その後、宿に戻り夕食を済ませた後就寝した。

４０話「引き継ぎ終了っ！」

は～い、おっはよ～ございまーす。

昨日は買い物終了後そのまま宿戻って爆睡しました。女性になったからか毎日学校と家を往復する事が無くなったからなのか体力が落ちてる事を実感する1日になったよね……まだちょっと足痛いわ

今日は朝から馬車の揺られレイの町に帰る予定となっております。

本当はこの先も計測する必要があるんだけど一応社長の私が会社を離れてるって、もしも重要な書類とか来てたら対応出来ない訳だからそのもしもがあっても被害が最小限になる3日間の町出を私は勝ち取ったのです（Ｙｕｉとの交渉は正直もうやりたくない…（だってあの雰囲気怖いんだもん））

「……よいしょっ、鍵良し、忘れ物良し準備完了！」

支度が完了したので受付に鍵を返却して馬車の所へ向かった

～～～

「結構軽いな…それでいいのかＨｉｋａｒｉ?」
「うん、今日は本当に引き継ぎをして帰るだけだから話す事は無いんだよね～……もしかして校長みたいな感じに無駄話を何分かして欲しかった?」
「それは勘弁してくれ。つまらない話を聞きながら立ってるって以外にしんどいんだ」
「まぁそれは私も痛い程知ってるから最初からやるつもりはないよ」
「なら安心だ……」
～～～

「はい」

これで引き継ぎ終了っ！一応補足をしておくと、有事の際の連絡は電話が開発されたとはいえまだ馬車郵便だから会社に届いた時には「こういう事件が起きました」から「こういう事件起きてました」になっちゃうから実質サバイバルなんだよね。しかも馬車郵便は町内から町内へか町から町への２つか無いから余計に不便になっちゃってるも駄目だよね…（村にも馬車郵便を導入して欲しいわ…）

「おーい、測定器の積み込み終わったぞー」

「りょうか～い……それでは出発！」

こうしてアルルの町を離れレイの町への帰路についた

４１話「Ｈｉｋａｒｉ、安らかに眠れ」

「着いたー!!」

わ～いやっと会社に着いたー!

結果やっぱり馬車は乗り心地最悪だと言う事が実感出来てしまった調査だった……

（もはや関係ない）

一応私なりに改良してみてはいるんだよ? 例えば座席を列車に使ってる物にしてみたりだとか、車体を支えるバネをいれてみたりだとか……まぁバネの方は揺れが余計に激しくなって吐きそうになったけど…（アレは地獄だった）

「ただいま～ってオウッ⁉?……何この書類の山」

何故か私の机の上に束ねられてる書類の山…アースッゴイタカーイ（白目）

「あっおかえり～重要書類机の上に置いておいたからお願いね、因みに期限は明日か明後日の物が殆どだから」

「ヒェ…」

ほら、思わずＫａｉも悲鳴上げちゃったじゃないですかーだからねっ！私としてもこの量は流石にキツいと思うんですよ（アセアセ）

「ま、まぁこれも社長だからだろ！な！それじゃあ頑張れ！重要書類らしいから俺は手伝えないけど!!」
「え、Ｋａｉ…お願いだから助けｔ」
「それじゃあ俺はちょっと用事があるからまたなー」バタンッ
（社長権限で道連れにしようと思ってた）
はぁ……やりますか（うぅ……まだ痛い）

～～～

「おはよーＨｉｋａｒｉちゃんどうなってる？」
「おはようＹｕｉ、ご覧の通り真っ白になってるけど…生きてるのか？」
「あ、書類は全部処理したんだ。まだ１週間くらい期限あったんだけど」
「？…ちょっと待て、昨日『期限は明日か明後日の書類が殆ど』だって言ったよな？」
「あれ～言ったかな～昨日までは書類仕事が忙しくてもしかしたら他の書類のとごちゃごちゃになってたかもだから分からないなーコレも全てＨｉｋａｒｉが無理に測定に行ったからだよね～私悪くないよねー」
「……ご愁傷様だ。Ｈｉｋａｒｉ、安らかに眠れ」チーン
「か、勝手に殺さないで……」
「あっ生き返った」
「酷いよＹｕｉ……それ私初耳なんだけどぉ…私の努力を返し…ｔ……」ガクッ
「今度こそ、逝ったね…」（ｏ＾＾ｏ）
「・・・」スピースピー
「あっ寝てるだけだコレ」
「・・・」スピースピー
「……仮眠室に連れて行くか」
「そうだね…流石に私もやり過ぎた感じあるし」

その後２人でＨｉｋａｒｉを仮眠室に連れて行って仕事を始めた。

４２話「わざわざ列車を一本逃してやる事」

さて、私が計測が終了して期限に余裕がある書類を一晩でやって力尽きてから早数ヶ月……

遂に……遂に！

「営業運転開始だー！」

「俺は正直書類仕事ばかりで実感も何も湧かないけどな」

「それじゃあこの後開業した区間を早速乗ってみようよ！」

「そう言ってるけど実際は自分が乗りたいだけだよな…」

「うっ……　だ、だけど新線の状態とか知らずにいるのもアレじゃない？ね？」

「……確かにそうだが」

「良し！なら行こう！今すぐ行こう!!……先に駅に向かってるね～」バタン

「……は？え、なんか置いてかれる事多くないか俺ー！」

～～～

「……さて、ここはお馴染みケイ駅です。今まではここが菜森鉄道の終点だったのですが、周辺町の強い要望によりこの度延伸する事となった路線であります」（エア眼鏡クイッ）

「Ｈｉｋａｒｉ、それは誰の真似なんだ…」（しかもわざわざ列車を一本逃してやる事がコレなのか）

「まぁまぁ気にしないで……お、乗車する下り列車がホームに到着した様ですね。牽引機はＤ５１、客車は旧型客車…ふむ、時代を感じますね」

「（時代を感じるってコレが普通じゃないのか？）」

「……えーと、後言わないといけないのは～……もう飽きたからいいや、それじゃあ乗車！」

「りょーかい」

補足をすると今回の延伸と同じタイミングで客車、ＳＬ、貨車の追加製造をして全編成を４両から７両へと変更し、Ｄ５１蒸気機関車４機、入れ替え用にＣ１１蒸気機関車３機を追加製造して、貨車は既存のスニ４０を２０両を追加製造した結果、予備として製造した物も含めて客車は４５両、機関車１５機、貨車が３６両（？）となった。

……　ここで開業時に説明した両数と今回新規製造した貨車の両数を足しても６両足りないと言う事に気付いた方はいるのかな……いないか。。。。それでは説明しよう！

実は鉄道によって地ｋ…じゃなくて町が活性化した事によって住宅需要が大幅に増えたのだ、町が発展する事は良い事なのだが、鉄道会社側にとっては予想してた課題が遂に出てきてしまった…

それは……「既存のパレット貨車じゃ運べない荷物の運搬が出て来てしまった」のだ

今の所、その「運べない荷物」って言うのが「建築資材」の事なのだ

そもそも基本的に家の建築には大事な柱部分は木材で出来ているのだが、将来折られては困るというか折られちゃ駄目な部分だから釘などで木材同士を接合するのでなく一本の木で作られているのだが、その木の長さは平均で約７ｍ、我が社が所持しているスニ４０の全長よりも短いから行けそうに見えるがスニ４０は「パレット用貨車」（本当は客車だけど）、パレットを積む事に特化させているので、貨車への扉が木材の柱を積むには明らかに狭いのだ。

と言う事でケイの町としては出来るなら時間、費用がかかる馬車よりも鉄道を利用したいそうで、何度も話し合った結果、木材運搬用に新規で貨車を作る事に決まったのだ

そうした経緯で今回導入される事に至ったのがこの「チキ７０００」だ。

前の世界だと線路の運搬用として作られたかと勘違いするレベルで活躍しているが、実は国鉄財政難時に汎用長物車として製造され、最終的にトラックに仕事を奪われ殆どが廃車となっていまった不運な車両なのだ……

私としては、木材運搬用に導入したけれども、限られた用途にだけじゃなく様々な場面で大活躍してくれる事を祈ってる

４３話「需要が多過ぎたのじゃ」

列車に乗車し「予約していた」ボックス席に座ってリラックスする……

「あーやっぱり快適だ～」

「それなー」

またまた解説をつけると、今回の延伸で変化した点は前回（？）話した専属貨車の追加と列車の両数増加の他に乗客へのサービス向上の為。７両の内の１両に「指定席車両」を導入してみたのだ

本当は自由席グリーンみたいなのを導入したかったのだが２回建て車両を２両も繋いで無いので混雑度的に席の取り合いになるのは容易に想像出来てしまうので指定席となった（けして車内を豪勢に出来る程の資金が無かったとかじゃ無いよ？）

因みに指定席の予約は列車運行日の３日前、１１時から予約が可能となっている。（一ヶ月前からはキツかった）

まぁこんな感じで今回の延伸では資金不足が原因で妥協してる点が多いのだが、理由は簡単だね

「一気にやり過ぎた」

この一言に尽きるのである……（需要が多過ぎたのじゃ）

今回の延伸でやった事

・新線建設（長距離＋複線）

・機関車、客車、貨車の増備

・駅構内配線、券売機などの設備改修、増設

・乗務員の新規雇用

・車両製造工場、車両基地の新設

はい。これらの事を段階的にでは無く私の思いつきで一気に実行した結果がコレなんですよねぇ……（しかも延伸開業した言ってもまだアルルの町までの開業だけど）

本当はコレらに＋して既存の区間の複線化もしたかったけど資金がなくて諦めてたりする……（開業時からある最大のネックなんだけどなぁ…）

～～～

くぞ」
「えっもうそんなに時間経ってた？」
「うん」
「えーそんなぁ…車窓見るの楽しみにしてたのに……」
「車窓なら今見れてると思うんだが…」

「そうじゃないんだよ！私はその区間のみにある地形の変化とかを見たかったんだよ！……あー私の馬鹿野郎ー」
「な、なる程？（よく分からん）……ん？そういえばこの駅って貨物用ホームって無いんだな」
「よく気が付いたね！Ｋａｉ君!!」キュピーン
「!?（き、急に元気になった…）」
「今回！アーク駅では貨物専用ホームを設けるほどの輸出入が少ない事を考慮して貨客併用とする事になったのだ！（その為ホームが少し大きくなっていたりする）」
「お、おう」
「それに＋してアイラ駅にて貨物の荷卸、積込みに時間が掛かる影響で、駅での列車の交換作業が出来ない事などを教訓に、列車が貨物ホームに停車していても、列車の追い越

し、すれ違いが出来る配線にしているだー!!」

「おぉー」パチパチパチ

〜〜列車の旅は続く〜〜

４４話「これが本当のお財布キラー☆」

Ｈｉｋａｒｉ達が乗った列車がアイラ駅に停車してから数分
「ふっふーん！どうだースゴいだろ～……あっもうすぐ発車時刻だ」

「え？あっ本当だ……てか停車時間めっちゃ短いな」
「ふっふっふ、これが複線の効果なのだよ！この他にも列車の本数を増やせたり正面衝突などの事故を防止出来る効果もあるのだ――！」ババーン
「そんなにメリットがあるならなんでレイの町からケイの町まで複線化しないんだ？」
「うっ……そ、それは言わないお約束やで……」グサッ
「あっ悪い」
「まぁ私が一気に延伸とかやり過ぎたから資金がつきただけだからいつか複線化工事もすると思うよ」
「資金が溜まったらすぐ工事する訳じゃないんだな」
「ただ工事する事は出来るけどダイヤを作らない行けないから時間がかかるんだよね……」

「大変なんだな、ダイヤ作りって」
「いや、今はまだ楽だと思うよ、今後路線が増えるとその分ダイヤを組まないと行けないから……」白目
「面倒そうだな…頑張れ」
「うん……」

～～～

「本当かぁ？」
「!?ッ……あっ、えっとーそのー」
　ま、不味い…Ｋａｉの顔がすぐ側まで、わーＫａｉって結構顔整ってるんだなぁ…イケメンや（あれ？てかなんでドキドキしてるん???）
「おー？どしたー??口籠ってるけど本当はどうなんだ～？」ニヤニヤ
「うぅ…そ、それわぁ……『まもなく、終点アルルに到着です。お出口は左側です。お忘れ物ありませんようご注意下さい。本日も菜森鉄道をご利用頂きましてありがとうございました』…ほ、ほら！もうすぐ終点だから早く降りるよ！」
「ちぇっ、はーい」
「……えーこほん。なんやかんやありまして、到着いたしますがここアルル駅です！この駅はレイ駅と同じ様に車両を留置出来る設備を有していますが、レイ駅と違い駅に隣接されており、車両の留置の他に車両の製造、修理、改造が出来る車両工場も敷地内に存在してるのだー！」ドッカーン！
「おぉ！つまり新しく機関車、車両を作ったりした時は？」
「今までみたいにパーツに分割してレイ駅の車庫にまで持っていって組み立てる事はもう無いのだ！（製造から０秒で出発進行！）

……まぁ色々と設備を詰め込み過ぎたせいで村一つは収まるくらいの土地を有する事になっちゃったり、分岐が沢山あるからレイ駅よりも整備も大変だったりするんだけどね☆」（多分一番維持費がかかるよ！（これが本当のお財布キラー☆））

「今の規模的にちょっと過剰だよな」

「うん……」

「駄目じゃん」

「でもシャラの町まで伸ばした時には必要になるから……ね？」

「確かにそうか」

「そうだよそうだよ！それじゃあ早く行こう！ね!!ね!!!」服グイグイ

「あ、あぁ」

とりあえずＫａｉを連れて改札へ向かった。

４５話「流石にもう騙されないよ！」

改札を出てから数分、Ｈｉｋａｒｉ達は商店街をぶらぶらと散策していた。
「……　な～あ～Ｈｉｋａｒｉ～俺少し飽きてきた」
「待って、もうちょっと見て回らせて、もしかしたら掘り出し物とかあるかもしれないし」
前回、ここの鍋とか買ったんだけど安いし使いやすいしスゴい良かったんだよねぇ～
「……　足が疲れて来たなー」
「…　えー、じゃあ後ちょっとだけ回ったら会社に戻ろうか」
「よっしゃー！じゃあぱっぱと回って帰ろう！」
「はぁ……　本当に調子が良いんだから……」
～～～

「そうか？じゃあなんで駅を出た時よりも日が暮れて来てるんですかねぇ……」
「まぁまぁ、落ち着いてやＫａｉさんや」
「ん？俺は冷静だぞ??」
「か、Ｋａｉ？なんか顔が怖いよ…」
　Ｋａｉってなんやかんや言っておきながら付き合ってくれるのが優しいよね…
（^ ＿ ^ ；）アセアセ）
　てか今はどうにかしてＫａｉの怒りを鎮めないと、死ぬ……私が
「あ、Ｋａｉ！ちょっと探検してみない？」
「ん、探検？」ピクッ
　よし！食いついた！
「そう！探検！…ほら、日が沈んで来た言ってもまだ夕方までには時間があるじゃない？」
「確かに」
　よしよし…そのまま……
「だからさ！ちょっと町の裏道とかちょっとだけ、ちょーっとだけ探検してみるのはどう？ね？」
「いいね、やろう探検」

やったぁ！勝った!!第三部完！
これで危機は救われた！
「よし！それじゃあ早速行こう！時間はあるって言っても短いからねっ！」
「おう！」

～～～

「ちっ」
「舌打ちしない」
「別にいいじゃん、Ｈｉｋａｒｉがビビる姿面白かったし」
「面白かったって、もぉ……こっちは本当に怖いんだよ？」
「悪かったって……そうだ、お詫びにさご飯奢るからさ許してくれよ……
あれ？Ｈｉｋａｒｉ？」
「ｋａｉ～こっちこっち」
「あっいた…どうしたんだよ、いきなり先行って」
「ねぇ、この子達を見て」
「……まだ小さいみたいだし孤児だな」
「君達、名前は？」
「……」
「……」
「……」
「……Ｋｉｒｉｙａ」
「……Ｎｏｎｏｋａ」
「Ｋａｉ、この子達を家で面倒見れないかな」

「２人くらいなら別に問題は無いけど」
「じゃあ決まりだね……えっと、Ｋｉｒｉｙａ君にＮｏｎｏｋａちゃん。私の所に来ない？」
「……何をする気だ」
「別に詐欺とかじゃないよ、私が経営している会社で書類仕事とかをして欲しいだけ、衣食住は保証するし、福利厚生も備えてるつもりだよ？」
「……」
「とりあえず、今後こうやって過ごしていくより安心した生活を送れる様にする事は保証する。どう？」
「……分かった」
「！、それじゃあ早速ちゃんとした服とか食事とかを揃えて行こう！……あっ自己紹介がまだだったね…私はＨｉｋａｒｉ、こっちはＫａｉ、よろしくねＫｉｒｉｙａ君。Ｎｏｎｏｋａちゃん」

４６話「大人の女になってる!?」

「たっだいま～!」
「あ、おかえｒ……」
「どうしたの?Ｙｕｉ?」
「あー……その子達は?」
「えっと……昨日からうちで働く事になったＫｉｒｉｙａ君とＮｏｎｏｋａちゃんです!」
「…出来るならどうしてそうなったのかをはじめに説明して欲しかったな」
「ほら、最近私達の仕事が増えて来て大変じゃない?だから作業を分担しようと思って～……じゃダメ?」
「じゃダメって私に聞かれてもどうせ決定事項なんでしょ、実際最近は新線の事とかで人手が足りてないのは確かだから助かるし……改めまして私はＹｕｉ、よろしくね、Ｋｉｒｉｙａ君、Ｎｏｎｏｋａちゃん」
「……よろしく」
「よろしくお願いします」

「昨日今日は色んな事があったし、実際に働きはじめるのは来週辺りからにしようか。それまではこの会社の人達の事を覚えてもらう感じでいいかな」
「分かった」
「……」コク
～～～

「いや、カッコよくは無いだろ、袖とかブカブカだし」
「あ、それは意図的だから大丈夫！」
「テメエ、おちょくってんのか！」
「いやいや、こうした方が子供駅員とかみたいでカッコ可愛いかな～って思って……ね？」
「はぁ…まぁお前はそういうヤツだってのはここ数日で理解してるから別にいいや」
「『お前』じゃないよ、Ｈｉｋａｒｉって名前で呼んでよ」
「はいは～い」
「もう……いつになったらちゃんと名前で呼んでくれるかなぁ…」
「まぁ良いじゃない、多分恥ずかしがってるだけだよ」
「Ｙｕｉが大人の女になってる!?」
「え、そんな事無いよ…気のせいだよきっと！」
「大人の女……かっこいい」
「Ｎｏｎｏｋａちゃんまで…」
「Ｙｕｉ……立派になったな」
「Ｋａｉは誰目線なの？」
「……私もかっこいいって言われる存在になりたいなぁ」

「Ｈｉｋａｒｉちゃんは仕事してる時とかカッコいいから別に気にしなくてもいいと思うよ」
「Ｙｕｉ～！」
「きゃっ、ちょっとＨｉｋａｒｉちゃん急に抱きつかないでよー」
「え～いいじゃん」
「そうだぞ、そろそろコイツ書類らを処理しないと後が厄介になるぞ…ほら、とっとと終わらせようぜ」
「……Ｋａｉがちゃんとしてる!?!?」

その後、ＨｉｋａｒｉはＹｕｉとＫａｉが大きく成長してる事を実感した日となった。

４７話「いいセンス」

「大変お待たせいたしました！菜森鉄道、延伸開業いたします！」
「出発進行」
ボーーーーー!!!!!!
～～～

「あ、それの事か…でなんだその寝台特急ってのは？」
「結構忘れてるじゃん……寝台特急っていうのは、簡単に言うと寝れる様にベッドがある優等列車の事だよ」
「へ～、じゃあ移動する宿って事か…レストランとかもあるのか？」
「出来るなら食堂車も入れたいけどまだ技術的に厳しいかな、後今回の寝台列車は運行時間は短いから連結しない予定なんだ」
「マジか、そりゃ残念」
「で、どうする？」
「俺は行きたい！明日から休日だし良いだろ～？Ｙｕｉ」
「でも、仕事が」
「私、Ｙｕｉと海行きたいなー」
「……でも……」
「Ｎｏｎｏｋａちゃんと Ｋｉｒｉｙａ君も誘ってさ、５人で楽しもうぜ～」
「……でもぉ……」
「Ｋｉｒｉｙａ君とＮｏｎｏｋａちゃんともっと仲良くなるいい機会だろうな～」
「……し、仕方ないなー」
「良しっ！勝った!!」

「じゃあ行くのは良いけど、今日中にちゃんと仕事を終わらせてからね！」
「それはもちろん！」
「よっしゃ、そんじゃあ一瞬で終わらせて海に行くぞー！」
「「おー！」」

～～～

～～～～～

「５Ａは～……ここか」

いや～一回乗ってみたかったんだよなぁ…ブルトレ。

シャラの町まで延伸する時、軽く計算したら６～７時間かかるって事が分かって正直鉄道を使っても馬車時変わらず行けそうにないな～って思ってたんだけど寝台列車ならその辺は寝れれば体感では一瞬で行けるって事を思い出せて良かった

まぁ日本とは環境が違うから車内にかなり相違があるけどね…防犯の観点から全室鍵付きだし、運行時間が短いから座席への転換は不可能になってたりする。

「でも、まさかブルトレが１編成作るだけでＳＬ３機は買えるお値段になるとは思ってもいなかったな……さすが魔石」

ブルトレ　、とりあえず設計してみた所、やはりかなりの電力を消費するので電源車が必要な事が分かったんだけど、この世界にはディーゼルエンジンはまだ存在しない訳で、電源として魔石を用いようと思って「魔石く～ださい」って言ったら「金貨（やべー値段）枚だよ」って言われて一瞬頭真っ白になったよね……

おかげで様で現在金庫がただの鍵付きボックスに変わりました……

まぁそういう事で延伸したのにＳＬの数が足りず予備も全部運用に回しす事になったり、レイ―ケイ駅間は複線化への道が更に遠のく結果となりましたとさ

ちゃんちゃん……辛み。

４８話「うん!飲もう!!」

ガタンッコトンっ……カタタンっ
　カシュッ
「……ぷはぁ、くぅー!」
お酒ウマーーー!!!
やっぱり窓の外見ながら飲むのって最高だよね～
この世界はありがたい事にお酒に年齢制限は無いからね!飲むか飲まないかは個人の自由!いや～いい世界だ
しかも個室だから部屋真っ暗にして飲んでようが誰にも迷惑かからないというね!もうパーツとやるしかないよね!!

……でもＹｕｉ達とは部屋別々なんだよなぁ
いざ部屋を取ろうと思ったら４人部屋１部屋しか残ってなくて、その他２人用か１人用しかなくて３部屋取るのとかもどうかってなって最終的にＹｕｉ達４人と私一人っていう事になった訳ですよ

まぁ社長の私がいたら雰囲気固くなっちゃう可能性があったし、それにおかげで今好き放題に出来るからね!!明日目一杯みんなで楽しめばいいもんね!うん!飲もう!!

～～～

「Ｋｉｒｉｙａ君それ本当？」
「本当かは分からないけどシャラの町に伝わる古い言い伝えらしいけど…まぁ準備運動を良くすれば噛んでこないらしいし問題無いだろ」
「そ、そうだよね」
「よーし、そろそろ海に行こうぜ～」
「ん…おい、アイツはどうした？」
「あれ、Ｈｉｋａｒｉがいない？」
「ごめん……おまたせ、ちょっと頭痛で片付けるの手間取っちゃった」
「大丈夫？…頭痛ってどうしたの」
「いや、普通にはしゃぎ過ぎて……多分飲み過ぎだと思う。でも少しすれば治るよ」
「お前、飲み過ぎでって馬鹿だろ」
「う、ごもっともです…」
「もう……次の日は仕事だから帰りは飲まないでね」
「はーい」
「よし、今度こそ全員いるな…それじゃあ行こうぜ！」
「「うん！」」
「はい」

「ああ」

４９話「海ー!!」

「遂に来たね……」
「あぁ…遂にだ」
「「海ー!!」」
「おぉ…本に書いてあった通り本当に水が青いんだな……」
「よし！早速泳ぐか！」
「Ｋａｉ、ちゃんと水着に着替えないと駄目だよ！」
「あ、そうだった…そんじゃあパパっと着替えて来るわ！行くぞＫｉｒｉｙａ！」
「は、えっうわっ!?……あああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」
「…Ｙｕｉ、Ｋａｉ…すっごくはしゃいでるね」
「……私達も着替えようか」
「…はい」
「それじゃあ私、みんな荷物見てるね」
「え、Ｈｉｋａｒｉちゃんは海に入らないの？」
「……いや、私はもう既に着てるから後はズボンを脱げば良いだけだから大丈夫！」

「…一番はしゃいでるのはやっぱりＨｉｋａｒｉちゃんだったね」
「え、そんな事ないよ…ほら早く着替えておいでよ」
「ふふ、それじゃあ行ってくるね」
「は～い、いってらっしゃ～い」

～～～

「Ｈｉｋａｒｉは泳がないのか？」
「あ、そうだよね……よいしょ」
「!?お、おいＨｉｋａｒｉ!何してんだいきなり脱ぎだし……て……あれ？水着？」
「ごめんＫａｉ、実はもう下に来着てたんだ」
「な、なんだ……ビックリさせやがってよぉ」
「本当にごめん、それじゃあ遊ぼっか」
「おう!!」

～～～

「まだまだだ！」
「６０！」

……スゴいな～Ｋａｉ。あんないかにも海の男って感じ人とビーチバレーをやり始めたけど全然体力減ってる様子ないじゃん、てか相手の方が疲れて来てるし…なんだこのスポーツ万能イケメン

最初は私も着いて行けたんだよ?…だけど段々とペースとか上がって行って、最後は普通にボールを返せずアウトってね……やっぱり私は浜辺で本読んでゆっくりとくつろぐのが合ってるんだよ、うん…別に海がしょっぱいからちょーち苦手とかじゃ無いし、全然泳いだり出来るし、水着も着てるし

「７８！」
「もう……無理」
「７９！」
「テイヤァ！」
「勝負あり！」
「よっしゃ！勝った!!」
おぉ勝った、すご～

「……お前もだけどアイツもヤバくね」
「え、なんで…私ヤバくないでしょ」
「……知らね」
「その反応絶対何か思ってたりするよね!?そうだよね!?」
「さぁな」
「さぁなって…話の種はＫｉｒｉｙａ君でしょ……」
「Ｈｉｋａｒｉちゃーん!、こっち来てちょっと泳ごうよ～」
「オッケーいま行くー!」

～～～

「はい！」

そうしてＨｉｋａｒｉ達の小旅行は終わりを迎えた。

レイの町ーシャラの町間
５０話「駄目じゃん」

「いや～ドラン―シャラ駅間に宿の誘致には失敗しちゃったけどドランの町で十分に宿として機能しているっぽいし良かった良かった」
「ひ、Ｈｉｋａｒｉ！マズい事になったぞ！」
「え、なになに……へ？ドランの町がカラの町と戦争するの？」
「まだ確定じゃなくてピリピリしてる段階らしいがな」
「マズいじゃん！どうするの！戦争が起きちゃったら実質放棄する事になるし……てかなんで戦争になろうとしてるのよ…ドランの町の町長さん何も問題はないって言ってたのに…」
「それは……どうやら言い難いんだが鉄道の所為らしい」
「だよね…開業前は戦争するだなんて一言も聞いた事無かったもんね、詳しい事って分かる？」
「…簡単だ、鉄道によってカラの町より宿泊料が安いドランの町に宿泊客が流れただけだ」

「え、なんでお客が奪われただけで戦争になるか知ってるの？Ｋｉｒｉｙａ君」
「それはカラの町は今までシャラの町に旅行に来た旅行客を頼りに生活してるからだな」
「だったらカラの町まで鉄道を延伸して利便性を上げてあげれば戦争しなくて済んだりする？」
「いや、無理だな、カラの町は少しでも客単価を上げようと距離を離して馬車の料金を高くしたり、道中の川に橋をかけずに船で渡らせて料金を徴収するとかしてるから鉄道の建設は断られるのがオチだな」
「え、そんな事してるんじゃ鉄道が出来なくてもいつかお客が流れるんじゃない？」
「カラの町も生活する為には仕方ないんだろう……」
「シャラの町とくっ付いちゃえば解決なのにね」
「それもカラの町の町長が反対してるから無理だな」
「えー、どうせ反対理由って権力を手放すのが怖いとかそんな事でしょ」
「いや、町民の生活を守る為らしい」
「いや、別にくっ付いても宿屋なんだから問題は無いでしょ」
「まぁそうだが」
「それでドランの町は戦争する気はあるの？」

「やる気満々っぽいな」
「駄目じゃん」
「ドランの町って結構好戦的だからね」
「一体誰がこの町を安心だと思い込んで鉄道を敷設してしまったんだ！」
「Ｈｉｋａｒｉだろ」
「うっ現実を突きつけないでＫａｉ……と、とりあえず戦争に備えてシャラの町まで新規路線を計画しないと…」
「でもどうするんだ？平原は戦争で通れなくなるから無理だぞ」
「……いや、ある。山を越える事になるけど」
「だけど鉄道って坂が苦手なんじゃないのか？あそこを越えるのは無理に等しいぞ」
「確かに今までみたいに直線的に路線を敷設する事は不可能だけど大事なのは繋げる事だよ！」
「そうだね……それじゃあまずは資金集めと建設計画を立てないとね」
「うんっ！よ～し！がんばるぞー！えいえいおー！」
「「「？」」」
「あ……わ、忘れてください……」
逃げるように部屋を出るのだった

51話「Ｎｏｚｏｍｉちゃんです☆」

「……出来たよ！ルート案と車両の設計図！」
「マジか、相変わらず計画立てるのは早いな」
「でしょ～…で、どうよ」
　ふっふっふ、今回はかなり急だから色々欲ｂ……設備とかが積み込めないから修正に結構苦労したけど上手く出来たんじゃないかな？
「それじゃあこれから会議で人材とか施工方法とか話し合いますか」
～～～

「了解です」
「新型機関車って今までのｃ１１ともＤ５１とも全然違う機関車だと思うんですけど研修で結構時間かかりませんか？製造もですけど」
「いや、大まかな部分は他と一緒だし製造はこの会議後する行うから研修期間も十分取れるはずです。それでももし間に合わなかった場合は最悪Ｃ１１で凌ぎます」
「分かりました」
「他に意見などは？」
「……」
「それでは今日はこれにて終了とします。ありがとうございました」
～～～

「Ｎｏｚｏｍｉちゃんです☆キャハッ♡……きっつ」
無理、絶対持たない……変装なんだから地味でいいんだよ。うん
声は諦めましょう。私は無口な淑女なのです。
「それじゃあ行ってきま～す！」
「え、だｒ」バタンっ
よし、完璧ですね（確認）
それじゃあとりあえず駅にでも向かいましょうか……抜き打ちチェックです！

～～～

この感じ……元の世界のことを思い出すぜ……。

それじゃあ恒例の改札機に切符をシュあっ……

……

……

……

「お客さま？大丈夫ですか？」

「アッエッオッ……アッはい、すいません。初めて利用するので少し戸惑ってしまって」

ゆばあああああいいいいいいいいいいいいいいめちゃめちゃ恥ずかしいいいいいいいいいいいいああああああああああああああああああああああああ消えてしまいたい……

「…そうでしたか、良ければご案内いたしますよ」

すいません、お願(ころし)いします(てください)。

５２話「Ｎｏｚｏｍｉちゃんピンチ」

……さて、気を取り直して現在私はホームのベンチで休憩中です。
もう、帰ろっかな……死んだようなもんだし
本当、なんでこんなことやってんだろ。過去の自分を殴りたいわ
いやでも折角来たんだし……駅の改良点とかないか見てみますか

とは言ってもそう何か問題がある感じはしないけどね
ホームにヒビが入ってる訳でもないし時計もちゃんと動作してるし、刃物を振り回しながら走っている不審者が走って向かって来てるし……ん？
刃物を持った不審者？
そういえばさっきから人少ないかったけどてっきり列車が発車した後かと思ってたんだけどね。そりゃ不審者がいたら逃げますわな。まぁこういう時は保安部の保安部隊が駅員とかと連携して不審者に対処する訳ですよ。安心だね。
で今、目の前に不審者がいる訳ですね。おいおいおい保安部隊どぉこぉ？どうなってるんだこの会社は、一体誰だ責任者は……私か

「という訳でＮｏｚｏｍｉちゃんピンチ」
「あ、何言ってんだお前、今イライラしてるってのによぉ」
「いやいや、まさかこんな漫画や小説のような出来事が起こるなんて誰も予想できないでしょ」
「確かに俺もこんな変な女と会うのは初めてかもな」
「それじゃあここは一つ私を逃してはくれないかな～って」
「それは出来ないな、こっちはもう後が無いんだ」
「そうですか、残念です」
「ああ残念だ。なんかウザいから死ね」
不審者の手に握られていた大きめのナイフが目の前を掠る。
「このッ！」
ブンっとナイフが風を切る。
あーもう！周りを見渡しても増援が来る気配はまだない……
「オラァ！」
「ッ痛！そこ！」
右腕を刺されたが痛みを堪えて犯人の右腕を掴み地面に押し倒す。

「オラっ、離せ！」
「大人しくしなさい！」
　何とか犯人を取り押さえナイフを取り上げ遠くへ滑らせた時、やっと公安部隊が到着した。
「いたぞ！犯人だ！取り押さえろ！」
「動くな！大人しくしろ！」
「犯人確保！」
　痛った……かったけど何とか確保完了。
「お客様、大丈夫ですか？今病院へ」
「部隊長、私はいいから他に怪我人は？」
「え、その声って事はＨｉｋａｒｉさん!?…は、お客様に怪我人はいませんでした」
「ならよかった。念の為他の駅にも警戒体制を、後悪いけどＹｕｉ達に連絡お願いします」
「了解しました」
「ありがとう」
　どうしよ、めっちゃズキズキ痛いんだけど……ちゃんと治るかなぁ

その後病院に行って治療をして主にＹｕｉに「勝手にどこかに行くな」とか「危ない時は直ぐに逃げなさい」とかめちゃくちゃ怒られた。

５３話「Ｈｉｋａｒｉは私達の娘だから」

はいどうも～変装が完璧すぎてＹｕｉ以外の人に「誰？」って言われた系ＴＳおじさん（自称）のＨｉｋａｒｉちゃんだよ～

因みに現在は変装しておりませ～ん

今回は数日だけお世話になる予定の病室からお送りしておりま～す！

わー、殺風景な部屋ですね～誰もいません。ベットと荷物を置いたカゴがあるくらいですね。暇すぎて死にそうです。

一応あの後あの不審者は見事に御用となりトップが現在病室にいて不在の我が社はいつも通り平常運転だそうです。

あれ？私いらない子？（）

い、いや多分後々問題になるかもだし早く回復しなきゃね！……未だに痛いけど

お陰で利き腕が使えないという最悪な状況です。主に包帯で

なので字も書けない絵は元から描けない食事には苦労すると散々ですわ……あの犯人一発殴っておいた方が良かったか？

まぁ後の祭りですし受け入れますよ。

グゥ……

はぁ……はよ帰ってお肉とか食べたい。

～～～

「あ、お義母さん！」
「包帯取っちゃいますね」
「すいません、お願いします」
「Ｈｉｋａｒｉちゃん、荷物ってここに置いてあるので全部？」
「うん、そうだけど私が持つよ」
「良いのよ、Ｈｉｋａｒｉちゃんはまだ完治してないんだし、少しは親を頼りなさい」
「……ありがとう、お母さん」
「はい、取れましたよ。先生が言ってたようにまだ完全には治ってないので１ヶ月程は腕を振るなどは控えて下さいね」
「分かりました。ありがとうございます」

～～～

「あぁ、今日は早く上がれたんだ」
「そうなんだ」
「それじゃあお母さん買い物行ってくるね」
「私も手伝うよ」
「ちょっと買い忘れを思い出しただけだから1人で大丈夫よ」
「そうなんだ、分かった」
「行ってくるね」
「いってらっしゃい……それじゃあ私は部屋ｎ」
「Ｈｉｋａｒｉ、悪いが少し話したいんだ…いいか？」
「うん……どうしたの？」
「いや、怪我のことを聞きたくてな」
「え、お医者さんから聞いてないの？」
「あぁ、一応聞いているがＨｉｋａｒｉの口からも聞いておきたくてな」
「そうなんだ」

それから簡単にこの前のことを話した。
正直逃げることも出来たかもしれないけど多分日頃から訓練してるから装備を身に

付けていなくても、一人でも解決出来ると思ってしまった所があるのだろう。完全に慢心による自業自得だ…間抜け過ぎる。日頃から2人以上で行動、対応する様にって言ってるのに私が出来てないとはね、ダメダメ過ぎる。失格だな

「……私、このまま会社を引っ張って行って良いのかな」

「……」

「ごめん、話脱線してたね。忘れて」

「Ｈｉｋａｒｉは、今の仕事は好きか？自分の作った会社で鉄道を実現させて今も色んな人、物を運ぶことが」

「お義父さん違うよ、みんなを運んでいるのは私じゃなくて運転士さんとかだよ…私は会社で書類に向き合ってペンを走らせてるだけ……だけど好きだよ」

「そうか…じゃあ何も問題無いな」

「え？…で、でも今回のことでみんなに迷惑かけてしまったし評判とか」

「そうか？でも犯人は捕まえられたんだろ、怪我をしてしまったのは駄目だがお手柄じゃないか」

「そうかもだけど…」

「Ｈｉｋａｒｉはよくやってる。頑張りすぎかもしれない程な、だからみんなも少しくらい迷惑かけてくれた方が安心するよ」
「そうなの？」
「あぁ、昔からＨｉｋａｒｉは何でも一人でやろうとしてたからな、設計図ばかり描いてたから手助けするのも出来なくて見守ることしか出来なかったから今こうして悩みを聞いてやれるのが嬉しいぞ」
「……気付いてたんだ」
「あぁ、私もＲｅｎａさんと一緒だからな」
「そうだったんだ」
「Ｈｉｋａｒｉは私達から生まれた子供では無いけどそれでも私達の子供だ」
「うん」
「だから少しは頼ってくれよ？」
「うん」
「だけど今回みたいな無茶はもうしないでくれよ。初めて聞いた時すごいショックだったんだからな」
「うん、ありがとうお父さん」
「ほら、来週から会社に行くんだろ？もう部屋に戻って安静にして少しでも傷を早く治

しておきなさい」
「はーい」

「ただいま～、どうだった？Ｈｉｋａｒｉちゃん」
「大丈夫だよ、今は部屋で安静にしてる」
「そう……あなたは昔から悩みを解決してあげるのが得意よね」
「違うよ、Ｈｉｋａｒｉは私達の娘だからだよ」
「そうね」

５４話「は～いやりま～す」

「Ｈｉｋａｒｉ！今日から通常業務に復帰します！」
「じゃあコレよろしく」ドサっ
「おっふ……あの、Ｙｕｉさん？」
「はい？なんですか？」
「私、一応病み上がりみたいな感じなんｄ」
「（＾＾）」
「……は～いやりま～す」

毎度のことだけどどうして何かある度私の仕事量が５倍くらいに跳ね上がるのですかね？
お～い神様～聞こえてたりしな～い？
「Ｈｉｋａｒｉちゃ～ん？早く終わらせてね～」
「かしこまりました～」

……コレ、やらないと明日は無いよね

～～～

周りだっけ？」
「あぁ、動輪の方は終わってるから軸箱と主連棒だけだな」
「じゃあ軸箱の方やっちゃうね」
正直机に向かうより工具持って車両に向かってた方が私の性分に合ってるんだよね～
シュッシュッシュッシュッ……
特殊な工具を使い軸箱と車輪に僅かな隙間が出来るように綺麗に丸を維持したまま削って調整する。
現代と違って切削用の機械は無いので手作業で残り７個を行う必要があるのでかなり神経と腕を使う。
削るのも深く削っては力が多く必要となり削っても傷が残り丸では無くなってしまうし、逆に浅いと全く削れず進まないので時々確認しながらひたすら削って行く、こんな職人技が出来ているのもスキルのおかげなのだ
「いや～神様に感謝だね～♪……1個完成っ」
うんうん、問題なし
流石私、完璧に仕事をこなしてるわ
「ん？社長さん、その軸少し削りが浅いんじゃねぇか？」

「え……あ、本当だ」
「さては考え事でもしてたか？作業中は集中してやらないと怪我しちまうぞ」
「うん。ごめんなさいＡｋｉさん」
「怪我しないようにな」
「は～い」
　この後二回くらいミスした。